

戦闘民族サイヤ人の王子こそが最強であるべきなのだ！

ズラゴッグ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦闘に不向きと見なされ、辺境の惑星に派遣された戦闘民族サイヤ人の王子ターブル。

そんな彼はある日、頭を強打したことで遠い何処かの「何か」と繋がってしまう。

その影響によってこの世界が辿る歴史の断片を知ったターブルは、同時に彼の兄やその好敵手が至るであろう遠い強さの高みをも垣間見る。

そして、彼の内に眠っていた本能が疼いた。自らもその高みへ登らんと強さを追い求めよと。

サイヤ人の王子が強さを極めれば——いずれは創造と破壊の神々さえも恐れ慄かせ

る強さになるはずなのだ！

※この作品は逆力カロット現象とひよんなことからサイヤ人の本能が目覚めたターブルが最強を目指して頑張る話の予定です。

目次

D B + 1 話 すこし未来の最終決戦

1

其の1 AGE 738 : サイヤ人戦士

地球へ
31

其の2 AGE 739 : 侵入! サイヤ人

48

其の3 赤の宝石と龍球
66

DB+1話 すこし未来の最終決戦

東の銀河の外れにある辺境の無人惑星。

地球の約10倍の大きさを持つその星は、生命こそ存在しないものの大気や気温や重力のどれもが地球とよく似た環境を有している。

いわば、その星系における地球ともいべき星であろうか。

そんな無人惑星に今、暗黒魔術により生み出されたワームホールが開かれようとしていた。

ワームホールは時空を超えて戦士を転移させるための術式で、これまでも時空や並行世界を超えて様々な戦士達が召喚されている。

そして、今回のワームホールから召喚されてきたのもまた超戦士。

現れたのは、黒衣を身に纏った孫悟空……いや、“孫悟空と同じ姿をした者”だった。目を閉じ、腕組みをしたまま転移してきた“黒い悟空”だが、ワームホールが消えると目を開き、しきりに周囲を見渡していた。

『時の指輪』が指し示すままに飛んではみたものの、ここはいつたい……?』

「この星のことか? 東の銀河の、無人の惑星だよ」

「黒い悟空」がふと呟いた、独り言のはずの疑問に思いがけず答えが返ってくる。

下方からかけられたその返答の声に彼が目を向けると、どこか見覚えのある風貌の男が立っていた。

「……ベジータ？ いや、違うな……、お前は何者だ？」

「ベジータの弟のターブルだ。兄さんと似ているだろう？」

「そのターブルが私に何の用件だ？ ……ああ、それは違うか。私が時の指輪によって、戯れにこの場所に現れただけか。お前が知りうるわけがなかったな」

「黒い悟空」が右手の人差し指にはめた指輪をなぞる。それは現在と任意の未来との往来を可能とする『時の指輪』という神具。その力で彼は以前にも時空の歪みを渡る経験をしており、今回の転移もそれと同様のケースと推測していた。

それ故にターブルが時空の歪みに関係していたとしても、彼について知るわけがないと断じることができたのだ。

「そうでもないさ。オレはお前がこの場所に現れるだろうと、ここで待ち構えていたんだ」

「なんだと……？」

ターブルの思いがけない言葉に「黒い悟空」は訝しげに片方の眉を吊り上げる。

「なんでも、お前は魔族の召喚術に偶然引っかけた、この世界へ転移してきたらしい。

そしてオレは、ワームホールから召喚されてくるヤツを抑えるためにやってきた戦士だ」

「魔族の召喚にワームホール……ふつ、なるほどな。ありえん話ではない。だが、それならそれで構わん。人間が言う偶然も宇宙の真理に照らせば、神の業を世界が望んだということだ。そして、人間も魔族も神の裁きの前では等しく同じ」

「神の業に神の裁き、か……」

転移の理由を知らされても大きな驚きを見せるどころか「黒い悟空」は余裕の笑みさえ浮かべている。彼からしてみれば、現れる場所でなく人物について特定していたのなら話は違っていた、という笑みなのだが……。

その様子と彼の言葉にターブルは目つきを鋭く変え、さらに核心へと触れた。

「お前は、孫悟空じゃないな？」

「いいや、私は孫悟空さ……」

ターブルの指摘を一蹴し、「黒い悟空」は言葉が続ける。

「お前は私をここで待ち受けていたらしいが、生憎と私は忙しいのだ……。この世界が私を導いた以上、私の尊き救いをこの時代の全ての人間どもに与えねばならんからな」

「黒い悟空」が金色のオーラに表面を覆われた黒いエネルギー弾をその手に掲げ、小さな無数のそれに分けて飛び散らせる。

「死ねえっ！ サイヤ人っ!!」

「ちっ!」

ターブルは舌打ちをするとその場を動かさずに気をいれた。

その髪は金色へと変わり逆立ちを鋭くし、身体を包む気のオーラも同様に金色に輝き、スパークを帯びる。超サイヤ人——いや超サイヤ人を超えた超サイヤ人、いわゆる超サイヤ人2へと変身したターブルは迫りくる無数のエネルギー弾を両手で次々と弾き飛ばしていった。

「ほう、超サイヤ人……。この程度の攻撃は捌けるか。流星はベジータの弟、戦闘民族サイヤ人だな」

「お前が名乗った孫悟空もその1人だろう？ さっきからのお前の言いぶりを聞いてると、まるでお前はサイヤ人ではないみたいだ」

「そうだな。確かにこの身体は戦闘民族サイヤ人の、最強の戦士のものだ。……どうやらお前は私を偽物だと思ってるらしいが、これを見てもそう言えるかな？」

「黒い悟空」が手を開いた状態で両手首を合わせて前方に突き出し、そのまま右腰の横へと両手を動かす。ターブルも知る亀仙流の奥技、かめはめ波の構えだ。

「こいつ、相当なパワーを込めて……!」

「少しぐらいは相手をしてやってもよかったが、我が高みに相対するには悲しいかな非

力。私と戦うステージに上がるには、お前は前座にすら値せん！」

その身を包むオーラと同じ、どす黒い色のかめはめ波が放たれる。

「黒い悟空」の気功術は極めて優れており、溜めの時間が短いにも関わらず、そのかめはめ波には十分なパワーが込められていた。

黒いかめはめ波が己めがけて迫る中で、ターブルもその出力に冷や汗と苦笑いを浮かべる。

「確かにこいつは天才だ。一面をみれば、オレの知る孫悟空以上かもしれん……」

——だが。

そんな否定の言葉と共にターブルは一段、ギアを入れ替える。

頭髮は逆立ちを緩めつつ赤みがかった色へと変わり、筋肉量が減って細まった身体を赤色の炎のようなオーラが纏いつく。そしてその気はそれまでとはまったく異なった、純粋で高次元なもの……すなわち「神の領域」へと至る。

超サイヤ人と並んで伝説と謳われるサイヤ人の神、超サイヤ人神^{ゴッド}がここに顕現する。

「はああああ……！ づおりやあああ!!」

「蹴りあげた!!」なるほど、その姿……お前もベジータのように神の気を纏ったか。よからう、お前を我が偉業の前座に認めてやる」

超サイヤ人神となったターブルを前にしても「黒い悟空」は余裕の表情を崩すこと

はなかった。そしてターブルもそれを当然だろうと冷静に受け止めていた。

“黒い悟空”からは本気を出している気配はまるで見られないし、ターブルが知る悟空に至っては超サイヤ人に変身できるのだ。それも、数段階も上の姿に。

いまだお互いに力を隠しており、その隠した力の差がこの戦いの勝敗を分けるのだ。

「こいつは超サイヤ人ゴッドって、サイヤ人の神の姿なんだが……今の口ぶりだと、兄さんが同様のものをお前に見せてるらしいな」

「くつくつく……様子見だったようだな、お互いに。だがお前がその姿を出してくるのなら、それも終わりということか」

「小競り合いからなぶり殺しまでの戦闘のどれもがサイヤ人の常だからな。お遊びが過ぎるのは種族としての性さがかもな」

孫悟空が特に好む、全力での真剣勝負の前の探り合いにして準備運動。それは戦い好きのサイヤ人の本質とも取れる、時に欠点にもなるものだ。

孫悟空と同じ姿を持つ“黒い悟空”もその言葉に納得する。

「……とはいえ、トランクスはそうでもなかっただろう？」

「たしかに、トランクスはつまらんヤツだったな。……そうか、あいつはお前の甥にあたったな」

2人の関係性に、そう挑発を続けようとして“黒い悟空”ははたと気が付いた。何

故、ターブルは自分がトランクスを知っていることを把握しているのか。

初めて驚愕の表情を浮かべてターブルを見やる「黒い悟空」に、彼は笑みを深めて続けた。

「そう驚くなよ、ゴクウ・ブラック。いや……第10宇宙の界王ザマスって言うべきか？」

「貴様、どういうことだ……?!? 答えろっ!!」

激しく動揺し、それ以上に苛立ちを募らせた「黒い悟空」——いや、界王ザマス——はエネルギー弾を連射する。ターブルは舞空術を駆使して高速で飛び去ることで、ザマスとの距離を稼ぎながらそれらを躲していく。

だが、既にかかなりの距離が取られていたにも関わらずターブルの背後に突如としてザマスが現れる。そのありえない現象にターブルは既視感を感じていた。瞬間移動だ。

ザマスはある方法によって孫悟空の肉体を手に入れており、彼の技のほぼ全てを使うことができるのだった。

「くらえいっ!!」

「うぎゃっ!!」

ザマスの回し蹴りがターブルの背面に浴びせられ、大地めがけて蹴り飛ばされる。さらに、それまでの比じゃない出力のエネルギー波がターブルの背後に追い打ちで打ち込

まれる。ターブルはそのまま受け身を取ることでもできずに大地に叩きつけられた。

ザマスは大地にうつ伏せの状態でめり込んだターブルの側に降り立ち、問い詰める。

「お前に死ぬまでの時間を引き延ばすチャンスをやろう。お前は何故この私のことを知っている？ トランクスにでも聞いたのか？」

ターブルがゴクウブラックことザマスについて知りうるとすれば、それはザマス達と戦っていたトランクスや悟空達から聞いた可能性だ。だが時の指輪から感じられる反応では、この時代は一度ザマスも飛んだ悟空達の時代よりも前の時代らしい。ならば、何らかの手段でザマスが知るよりもさらに未来のトランクス達と接触して、その際にザマスについて聞いたとでもいうのか？

ここに現れるまでのザマスはもう1人の自分自身と組んで悟空やベジータを倒し、2人を過去へ逃がしたトランクスへとどめを刺さんと追っていた。まさか、最強にして不死身の自分達がああした後、3人のサイヤ人に敗北したとでもいうのか？

考えれば考えるだけ、ザマスは焦燥に駆り立てられた。

「トランクスだな。奴から何を聞いた!？」

「う、ぐぐ……。いいや、トランクスから聞いてもいないし、悟空やベジータ兄さんから同じだ」

「ならば何故だ！ 答えろ!!」

「はあ、はあ……。そう怒るなよ、別にお前らの末路がどうなるかなんてオレは知らないんだ。お前が将来、誰かに倒されるとか知ってたら、こんなになってまでここで止めないだろう？」

その言葉に、先によぎった不安と焦りが解けたザマスは一気に冷静になる。仰向けになり、よろよろと起き上がろうとするターブルを腕組みして見下ろしながら待つ程度には余裕を取り戻していた。

「もう一度聞こう。お前は何故、私のことを知っている？」

「その前に一言だけ言っておくが、ここはお前の知る世界とはまた別の並行世界だ。悟空はお前のことを知らないし、未来からトランクスも来てはいない。そしてオレは、ここにゲートが発生するって話を聞いたから来たまでだ」

「なに？」

時の指輪は1つの世界に1個が対応する形で存在する。全部で6個の指輪をザマスは持っているが、それらをつけ変えることで並行世界の時間をも超えられるのだ。

そのことをザマスは知っていたため、ワームホールと時の指輪が影響しあうことで並行世界の時間を移動させたのだろうと推察することができた。

「さっきも言ったように、お前がここに現れたのは事故だし……。ついでに言えば、呼び出した魔族とやらももういないらしい。かといって、お前が放置できるようなヤツじゃな

いからオレが抑えにやってきた……っていうわけだ」

「話が読めんな。お前はそれをどうやって知った？ 別の並行世界にいる私のこともそうだ。肝心なことをお前ははぐらかしてるな？」

「さあな。……さてと、おかげで休憩は十分取れた。ここからは仕切り直しだ。言っておくが、さつきまでのはオレの全力じゃない。同じようにはいかんぞ」

再びターブルの気のオーラが赤く激しく変わる。さきほど変身が解けた超サイヤ人神の姿だ。その神の気によってザマスに受けた背中の傷は塞がっており、ダメージもいくらか癒えているらしい。

「無駄なことを……。ならばあつさり殺すか、半殺しにして残りを吐かせるか。いたぶりながらじつくりと考えさせてもらおう!!」

ザマスが大地を蹴ってターブルへと詰め寄り、気の刃を右手に纏いながら振りかぶる。迎え撃つターブルは左右にフットワークを利かせてザマスの連続攻撃を巧みに避けていく。

「我が刃が恐ろしいか。だが、逃がさん!」

一旦、気の刃を消したザマスは後ろに飛び下がり、金と黒の入り混じったエネルギー波を放つ。それを上空へ飛ぶことで躲すターブル。

「チツ、小賢しい!」

ダメージの回復を狙っていると判断したザマスも追撃して気を放出させながら空へと舞い上がる。再び射程距離へと迫らんとしたザマスが右手に気の刃を纏うと、それを恐れてかテーブルはさらに気を爆発させてザマスに背を向けないまま後方へ退いて距離を取る。

それを見たザマスは人差し指と中指の二本を額に触れさせる。テーブルが飛び去ったさらに後方に瞬間移動して現れるザマス。

「臆病者め、逃げても無駄だっ!!」

「どうかな!？」

ザマスがエネルギー弾を急停止しようとするテーブルの背中へと叩きつける。だが、同時にテーブルが振り向かないまま背後へと放った気の刃の一撃がカウンターでザマスの左肩を貫いた。

「うぐっ!!」

「ぐ、うっ! なにっ……!?! ターブル、貴様あ……っ!!」

「瞬間移動は厄介だが、そうそう同じ手は食わんぞ。それにお前が使う気の刃だって、初めて見るわけじゃないんだ。サウザーってヤツが得意にしてた技だ」

出し抜かれた己の迂闊さにザマスは顔を歪めた。格下と侮ってはいたが、まさかこれほどの傷をつけられるとは思ってもいなかった。しかも、自らが得意とする気の刃と酷

似した技を使われての屈辱は、それまで行っていた「遊び」を終わらせるに充分だった。

「そんなに地獄を見たいなら、お見せしようじゃないか……私の超サイヤ人口ゼを!!」

ザマスの髪の色が白みがかかったピンクに変わり、黒紫にピンクが合わさったオーラが輝き、全身を包み込む。その姿は色合いと禍々しきこそ異なるが、超サイヤ人に酷似していた。

そして感じられるパワーもそれまでより一段と強くなり、また、超サイヤ人神のように気の質のレベルが数段上がっていた。

「お前の与えた痛みがオレをさらに強くする……。その褒美に、この美しい超サイヤ人口ゼの姿でお前の命を終わらせてやろう」

ザマスがターブルに貫かれた自身の左肩に手を向けて近付ける。神の気による治療かその傷はみるみる内に消えていき、ターブルからはもはやダメージは完全に癒えたように見えた。

「さあかかってこい。神の慈悲として、一撃だけお前がオレに攻撃を加えることを許してやろう」

「圧倒的に強くなったんだろうが、余裕ぶりやがって……。なら、お言葉に甘えて入れさせてもらおうぞ。渾身の一撃をな!!」

テーブルは全身のパワーを右手に集中させ、燃え上がるような炎の気で円盤を作り出す。

「気円斬!!」

かけ声のままに円盤状の気によるカッターをザマスめがけて投げつける。気円斬の切断力は相当な実力差のある格上の相手にも通用する、極めて優秀な技だ。ザマスでも直撃すればただでは済むわけがない。そして、驕ったザマスは攻撃を受けると宣言した。

ならば……。

「ふふん……なるほど、そういう手で来るか」

気円斬が目の前に迫りくる状況でも、ザマスは余裕の態度で動きを見せない。そして気円斬がザマスの服を掠めそうな位置まで届き、いかにザマスとてここから躲すのは不可能と思われた刹那。それまで見せたものよりもはるかに強力な黒紫の気の刃がザマスの右腕に発せられ、同時にその姿が掻き消える。

「受けよ、神烈斬!!」

「おうっ! うぎぎぎ……ぐあああつ!!」

3度目の瞬間移動。ザマスの姿が消えたと同時に、テーブルの左肩を背後から深々と気の刃が貫いていた。

苦悶の表情のターブルは宣言を反故にした背後のザマスへと顔を向け、睨みつける。

「ぐうううっ……! 元は神様だつてのに、ずいぶんと汚え真似するじゃないか……!」

「汚い? 神が人間との約束を守つてやる義理などあるものか。もつとも、くだらん技で悪あがきをしなければ受けてやつてもよかつたがな」

ターブルの言葉を平然といなしたザマスは苦しい彼の表情を見ると満足げに気の刃を締め、己の手刀でターブルの肩をえぐる。

「うぎゃあああああ!!」

「神の魂とサイヤ人の強靱な肉体が一つになることで至つた唯一無二の高みがこのオレだ。その尊さと美しさを垣間見ながら、無様に死んでいくがいい」

「は、はは……相当な切れ味だ。それ以上に、お前の嫌な気がオレの身体に響いてきやがる」

「苦しめ。その苦しみの声が神への懺悔となり、オレの怒りを鎮めるのだ」

「う、ぐぐ……だ、だがタイマンと思ひこんだのは、お前の怠慢だつたな」

「なに?」

「ダジャレだよ。き、北の界王様と聞いてたが、ずいぶんとリアクションが違うな」

「当然だ。オレはもはや界王神にして破壊神であり、唯一の絶対神。もはや他の神々とも次元が違うのだ。それよりも、今の言葉は冗談……、っ!? なんだ、貴様は!」

——直前まで、ザマスはその存在に気付くことができなかった。

その者はこれまでどこに隠れていたのか、ザマスに一切を気取らせることなく戦場近くに潜み続けていた。そして、ザマスと彼が貫いているターブルを挟んだその反対側に突然現れ、瞬間間に彼の指から時の指輪を奪い取ったのだ。

「な、なんだとっ!?! 貴様、オレの時の指輪を……!!」

「ご苦労様だ、パトローラーくん! せいっは間違はなく届けてくれよ!」

ターブルはそう叫びながら、自身を貫くザマスの右手を掴んで離させまいとする。その隙に指輪を持った『パトローラー』は空間転移のゲートを開き、それを通っていずこかへと姿を消した。

「逃げられると思うか! 瞬間移動で別の星だろうと別の宇宙だろうと、どこまでも追いかけてやるぞ!!」

ザマスはターブルを蹴り落として右手を強引に引き抜き、そのまま2本指を額につけて瞬間移動の体勢に入る。そうして、逃げたパトローラーの気を探索するが、その気は残滓さえもどこにも見当たらなかった。

「馬鹿なっ、気が感じられないだど!?! 気を消したか……いや、あの消える瞬間まで奴の気はあった。どこに逃げようと、現れた先にあつたはずの気を必ず探れるはずだ! まるでこの世界からそのまま消え去ったかのような……まさか!?!」

「そう慌てるなよ、ザマス。種明かしならオレがちゃんとしてやる」

その言葉にザマスが目を向ければ、地面へと叩き落とされたターブルが仙豆を食べ、体力と怪我を回復させていた。全快したターブルは貫かれた肩を何度か回した後、ザマスと同じ高さまで浮かび上がってくる。

「お前がムキになつて気の刃でオレをえぐってくるタイミングを計るのに苦労したぞ。あれで下手に切り裂かれたら死にかねないしな」

「あの時、オレの肩を気の刃で貫いたのはこれを狙つてか……。人間風情が神を謀るとは、楽に死ぬると思うなよ……！」

そのやり取りでザマスは察した。ターブルはザマスの油断を誘つて指輪を奪うため、あえて先の攻撃を受けたのだ。ザマスとターブルには明確な実力差があり、さらにターブルには手を抜いた様子は見られなかったことから、どうやら回復手段ありきの捨身の作戦だったらしい。

「ずいぶんと小賢しい真似をしてくれるじゃないか……。ところで、さっきのヤツは何者だ？ 答えないとは言わさんぞ」

「さっきのは時間の流れを守る、未来のタイムパトローラーだ。それで、戻った先はいつかの未来のどこかの宇宙だ。お前が得意げにしていた気の探索能力で探したところで、見つかるわけがないのさ」

「タイムパトローラーだと……!!? だ、誰の許しを得て、時間を守るなどと分不相応な真似を……!!」

「未来の話だからな。そんなこと、オレに聞かれても知るわけがないだろ」

ザマスの額に青筋が幾筋も走る。

（時間とは宇宙の摂理そのもの。それに触れることは神のみが許された特権だ。そ、それを人間風情が触れるだけでなく我が物にして管理せんとするなどと、なんたる驕り昂ぶり……!! あ、挙句の果てに界王神のみが持つことを許される時の指輪を強奪するなど、もはや神への冒瀆にして反逆行為……!! 12ある宇宙の過去・現在・未来でも最も罪深き愚者よ、宇宙を汚す大罪人どもよ。この絶対神ザマスが裁いて、この世からもあの世からも完全に消滅させてくれる!!）

ザマスは怒りにわなわなと震えた。孫悟空に対してよりもトランクスに対してよりも、目の前のターブルへよりも、これまで対峙した何者よりも。タイムパトローラーという組織とそれに組する連中へと、その怒りを向けていた。

「……そうか、全てが繋がったぞ。お前がオレのことを知っていたのも、そのタイムパトローラーとやらの仕業か。そして貴様ら人間の野望は成就し、オレという神から時間という宇宙の秩序を奪うことに成功した」

「そっとういっ」とだ」

「ふ、ふふ……ははははは！ オレの正義を志半ばで潰えさせ、これで勝ったという顔をしているな。だがそれが勘違いだというのだ、愚かな人間どもよ。まだ、何も終わっちゃあいないのさ」

「勘違いだと？ お前はもう時を超えることも元の時間に帰ることもできないはずだ」

「この時代には、オレもゴワスも時の指輪もドラゴンボールも存在する。ならば、再度同じことを繰り返せばいいだけだ」

「本物の孫悟空もいるし、この宇宙の界王神様も健在だぞ？」

「だからどうした？ この最強の肉体を持つオレの前には、邪魔者がどれだけ存在したところで意味をなすものか。この時代の孫悟空を倒し、さらなる力を得て存在する神々を全て片づけるまで」

ザマスは元の世界で行った所業を、もう一度この世界で繰り返そうとしていた。

この世界に存在するザマスを『同志』に迎え、自分達以外の全ての神々を殺して唯一の神となり、界王神ゴワスが持つ時の指輪を奪う。さらに自分と同じ肉体を持つ孫悟空を殺し、そして全宇宙の人間を殺しつくして世界を浄化しようというのだ。

「……なるほどな。たしかに同じことを繰り返されかねないわけか」

「そしてその暁には、タイムパトロールなどという大罪を犯した愚か者どもにも神罰を下さねばな」

「だが、そいつは不可能な話だ。お前はここで消されるんだ、このオレの手で」

テーブルは兄・ベジータによく似た態度でザマスに啖呵を切る。その言葉を受けたザマスは嘲笑した。

「ははははは！ 体力を回復したぐらいですいぶん大口を叩くものだな。超サイヤ人口ゼのオレの強さを今しがた思い知っただろうが。お前に勝ち目など、万に一つもありはしないぞ」

「ザマス……神の魂にサイヤ人の肉体を持つお前は、あくまで人間のサイヤ人が神の気を纏おうと届かない神のステージにあるのだろう。しかも、戦いを経るごとに何かを掴んで強さを上げるサイヤ人以上の天才戦士だというのがさらに厄介だ。そんなお前が超サイヤ人の力まで操れば、その強さはたしかに完璧に近いのだろうか」

「ふっ、オレのことをよく調べたらしいな……見事な研究ぶりだ。ならば分かっているのだろうか？ お前が隠してるだろう、ベジータや孫悟空と同じ超サイヤ人の姿になったところで今のオレには遠く及ばんことを」

ザマスはテーブルが超サイヤ人神のさらに上の変身、超サイヤ人神超サイヤ人という奥の手を隠しているとみていた。そしてそれを計算に入れてなお、自分の足元にも及ばない程の力の差があるとこれまでの戦いから読んでいた。

「なら、オレのとっておきの変身を見せてやろう。お前がどうやっても真似することの

できない、超サイヤ人の真の高みを見せてやる！」

ターブルが掌にエネルギーの球を浮かべる。特に強い力は感じられないが、通常の気功弾とは種類の異なるものだった。

「こいつはパワーボールだ。一部のサイヤ人だけが作れる代物でな……悟空には無理でも、お前なら作れるかもしれないがな」

「だからどうした。そんなもので何ができる?」

「こうするのさ。……弾けて、混ぜれ!!」

パワーボールを天高く投げると、上空で弾けて酸素と混ぜりあい、巨大な球体と変わる。それはまるで、数多の惑星の空に浮かぶ満月のような球……。

そう、ターブルのパワーボールは人工の満月を作り出すためのものだった。

「満月……? まさかとは思いますが、この期に及んで大猿にでもなるというのか!」

「お前の身体には尻尾が無いからな。いくら真似ようとしたって、こいつは真似られないぞ!」

「ふざけるな! お前が大猿になろうとオレには何の脅威にもならん。悪あがきにしても情けないぞ!」

「お前は神のままだからサイヤ人の本質まで掴めやしない。だから今からオレが見せる力にはどうやっても辿りつけないのだ! はああああ……つ!!!」

パワーボールによって作り出された満月からのブルーツ波をテーブルが吸収し、その気が一気に膨らみながら変化する。だがその姿は大猿に変身するわけではなく、等身大のまま黄金の輝きに包まれる。

「バカな……大猿ではないのか……!?!」

「大猿の力を取り込んだ超サイヤ人の最強形態、超サイヤ人4フォー！　そして！」

変化した気の質がクリアになり凝縮され、さらにそれまで以上に膨大な量に増加していく。

輝きの中から現れたその外見も、それまでのものとは大きく変化していた。赤みがかった長い黒髪に赤い体毛が覆う身体は、超サイヤ人神とは異なり通常時より一回りは大きくなっており筋骨隆々としている。

それはザマスが知る超サイヤ人神超サイヤ人こと超サイヤ人ブルーともまったく違う姿だった。

「これが、超サイヤ人4ゴッド!!」

超サイヤ人4ゴッド神。

それは超サイヤ人神と超サイヤ人4という別方向にある進化の到達点を掛け合わせた、サイヤ人最強の最終形態である。

赤いオーラに青いスパークを纏った凄まじいパワーと、不意の攻撃さえも難なく弾き

返すだろう強靱な肉体を誇り、超サイヤ人ブルー以上に気を穏やかに精密に扱えて、超サイヤ人4以上に強大で激しい力を持つという。

その威容はそれまで圧倒的優位にあったはずの超サイヤ人口ゼのザマスをも狼狽させるものだった。

「な……………につ……………!?!」

「この姿を名付けて、超サイヤ人4ゴッド。理屈でいえばお前が知っている超サイヤ人ブルーと同じようなものだ。当然、掛け合わせる力の分だけ違いはあるがな」

「なんだ、これは……………！　なんと醜い変身……………！　そんなケダモノ同然の姿にこれほどまでの強い神の気など許されるわけ……………つ、があつ!?!」

ザマスの言葉が途中で遮られる。いつの間にか眼前まで距離を詰めていたターブルがザマスの顔を殴り飛ばしたのだ。

ザマスはその動きに全く反応することができず、さらにターブルの手にはザマスが左耳につけていたはずの『ポタラ』——界王神の証である神具が握られていた。

「……………いつになつたオレに遊びはない……………お前はもう終わりだぜ、ザマス」

ターブルは小さな気のリングを4つ作りだし、吹き飛ばされているザマスめがけて投げた。それらはザマスの手足へとハマリ、空中に固定する。

さらに次の瞬間にはザマスの正面に現れたターブルが、黄金色に輝く気のオーラで彼

を包み込む。それは凄まじい気のエネルギーによって、太陽に匹敵する熱量を閉じ込めたオーラのドームだ。

「瞬間移動で逃がしませんが。一撃で消す!!」

「なんだとっ…!! オレを焼き尽くすつもりか?」

「完全に消滅させるのさ」

「くっ!! こんなチャチな輪っかなど…っ!! し、神烈斬で…!!」

気の刃を気弾に変えて応じようとしたザマスの抵抗を許すまいと、ザマスを包む金色のオーラに青と赤の層が加わる。それにより、気のエネルギーと熱量が爆発的に増した。

「ぐ、ぐおああああああっ!!?」

神域に至った超サイヤ人の力に大猿のパワーまで加わった気がどんどん注ぎ込まれ、オーラのドームの密度が高まっていく。

周辺の空間が歪むほどのエネルギーに、ドーム内部のザマスはもはや身じろぎさえ取れなくなっていた。

「ギャラクシーシャインエンドっ!!」

そのかけ声を合図にオーラのドームが一気に凝縮される。

仕掛けられたこの技の本領は気のエネルギーで相手を包み込んで焼くのではなく、包

んだ気を圧縮して相手を潰すことにあった。

三重にかけられた超高密度のエネルギーは、ザマスを押し潰し、さらに分解していく。「うぎやああああっ……！　オ、オレはあ……！　宇宙でもつとも……強く、美し……い

……！　こ、孤高の……頂……きつ……!!　か……み……っ!!」

断末魔の叫びを残して、ザマスは塵一つ残さずに消滅していく。孫悟空の肉体を手に入れて彼を超えようとした、堕ちた神の最期――。

そんなザマスにターブルが向けた言葉は追い打ちであり、とどめだった。

「――言い忘れたがな、ザマス。お前は確かに強かったが、この世界の孫悟空はお前よりもさらに強いんだぜ。この超サイヤ人4ゴツドのオレでも、かなわなかったんだからな……」

超サイヤ人4神の変身を解いたターブルはギャラクシーシャインエンドによるエネルギードームの消滅を見届けていた。

既にザマスが完全に消滅していることは分かっていたが、彼の厄介さについて何度も忠告されており、万一のためだった。

(しかし、ちよつともつたいたいことをしたかな。ザマスにはまだ強くなりそうな余地があった)

ターブルはザマスの戦い方や能力に関してとその危険性について、タイムパトロールを組織した「彼女」から事前に聞かされていた。

たしかに底知れない強さの持ち主だったが、本来は不死身となったもう1人の自分との完璧な連携によって、さらに数段強かったのだという。

その状態のザマス達と指輪やポタラの奪還など考えずに純粹に戦ってみたかったものだ、というのがターブルの偽らざる本音だ。

(それで最後にはポタラで合体させて……いや、流石にそいつは手に負えなくなるか) 戦い好きのサイヤ人としては未練は残るが、ザマスは生かしておける相手ではなかったのだから仕方がない。

タイムパトローラーに渡しそびれたポタラをどうしたものかという問題に頭を切り替え、近くに泊めていた宇宙船へと戻るターブルだった。

* * * * *

エイジ852。

ザマスから時の指輪を回収したタイムパトローラーは彼らの拠点・コントン都は時の巣へと帰還していた。

「お疲れさまでした。無事に時の指輪も回収できましたね」

「お疲れ様。ターブルがゴクウブラックは倒したし、転移元の世界のザマスも無事に封印されたわ」

パトローラーにとって上司にあたる少女とパートナーにあたる青年の2人が出迎える。

少女の方は時空の流れを守るタイムパトロール隊を組織した人物、時の界王神。一見すると少女のような見た目だが、7500万年の時を生きる古株の界王神である。

そして青年の方はタイムパトロール隊の一員にして時の界王神の補佐をする、*“どこかの未来の青年トランクス”* だった。

「ドミグラの残したワームホールもあれが最後だし、これで今回の件は解決ね。時の指輪もこっちで巻物の方を修正すれば大丈夫よ」

時の界王神は時の指輪を受け取ると、巻物を1つ取り出した。時を司る巻物『終わりと始まりの書』は歴史の改変により分裂する。時の指輪と同種かつ、より細分化されたものだ。その巻物は、宇宙の時の流れを管理する時の界王神がまとめることにより修正される。

「この分だと時の指輪は巻物の修正で、たぶん別の指輪と1つになるわね……」

「それはいい……」

「最初から、無かったことになるのよ。ゴクウブラックになったザマスに世界が荒らされるなんて出来事は起きなかったってね」

「そ、それって……よかったですか、時の界王神様?」

歴史の改変を防ぎ、正しい歴史の流れへと導くのがタイムパトロール隊であり、時の界王神だ。

その職務からすれば、正しい歴史……すなわち、ゴクウブラックがワームホールに巻き込まれなかった歴史の流れに戻すものと思われた。

だが――。

「仕方ないでしょ!　じゃあ、トランクスは自分の世界が1つ消滅するって未来でもいいワケ!」

「えっ!?　い、いえ、それは……!」

「今回は特別よ。候補とはいえ、界王神が時間の流れを乱す重罪を犯してさらに人間を滅ぼそうなんて、前代未聞だしね。私の権限で、歴史を大きく修復せざるをえないわ」

時の界王神によって時の指輪による干渉から解き放たれて修正された歴史は、ザマスの暴走そのものを消した。

悟空と出会うこともその存在について知ることもなく、指輪について教えられるのも1000年単位で遅らされた界王ザマスは、いずれ正しい界王神として第10宇宙を統

治するだろう。

彼を選んだ界王神ゴワスの期待通りに。

「でも、ザマスは何であんなことを……」

ザマスの所業も彼が迎えるはずだった末路も知るタイムパトローラーがふと疑問を挟む。パトローラーにはザマスが何故ああいう凶行に及んだのか理解ができなかったのだ。

「……ザマスは生真面目すぎたのよ。清濁の矛盾を抱えるのが人間で、それを見守る界王神はどこかでその矛盾を飲み込まなければいけない。あの子はそのことに耐えられなかったのでしょうね」

元々のザマスは正義感が強すぎるほどに強い界王だった。だからこそ、過ちを繰り返す人間や見守るだけの自分達に失望し……そして人間が神を超えるケースを知ってしまい絶望し、ついには凶行に走ったのだ。

「なら、またザマスが同じような事件を起こす可能性も……?」

「大丈夫よ、時間があれば人も神も変わる。ザマスだって、もつと経験を積んで年齢を重ねれば、いずれは人間を理解できるようになるわ。……案外ザマスも年をとったら、あのお爺ちゃんみたいなテキトーな界王神になるかもしれないわよ?」

時の界王神は、木陰でエツちな本を読みふける老界王神を指し示す。

この宇宙における15代前の界王神であるその老人は、タイムパトロール隊の組織化を手伝った人物でもある。

根は真面目だがスケベで偏屈な老界王神の人柄については、パトローラーもトランクスもよく知っていた。

「あ、ははは……。さすがに、ああなったザマスは想像つきませんね……」

「なんじやい、おまえら。ワシが真剣に読書にふけておるのに、何をこつちを見て笑つとるんじや——」

——こうして、エイジ850に現れた魔神の置き土産ともいべきワームホール事件も最後の1つが片付き、12の宇宙と複数の並行世界を巻き込んだ時空犯罪もここに解決した。

1つの世界の消滅は未然に防がれ、そしてコントン都にも平和な1日が戻ってきた。そして——。

（やはり、オレが起こした歴史改変も世界を消滅させる危険をはらんでいた。あのドミグラヤトワ達のそれと同じように。だから、オレは……！）

自らの未来に降りかかったかもしれない破滅の可能性にトランクスはタイムパトローラーとしての使命をあらたにする。この宇宙で最初に歴史改変をした償いのため

……そして、そうまでして守ろうとした世界とそこに住む人々のため。

ドラゴンボールの歴史はこれからも守られていくだろう。トランクス達、タイムパトロール隊がいるかぎり……。

其の1 AGE738：サイヤ人戦士 地球へ

「——なんだ……？ オレはいつたい……。この感覚はなんだ、どうということなんだ？」

その辺境惑星の中でも特に外れた地点の岩場の影で、1人の少年が困惑の声を上げていた。

少年は自分の身に何が起きたのか理解できていなかった。眠りから目覚めた瞬間、自身が何者なのか分からなくなっていたのだ。

だが、一方でその原因に心当たりはあった。目覚めた彼の頭の中に、明らかに自分のものではない知識が混在しているのだ。おそらくはこれが関係しているのだろう。下手をすれば、人格も目覚める前とは異なっているかもしれない。

何者かに乗っ取られたのか……。いや、おそらくは何者かと融合した状態に近い、そう感じられた。

「落ち着け……。ボクの名前はターブル……。戦闘に向かない気質から辺境の惑星に追いやられたサイヤ人の王子。そして、この世界は『ドラゴンボールの』……」

焦る気持ちを落ち着けて頭の中から情報を引き出そうと試みれば、だんだんと記憶が

クリアになっていった。自分が惑星ベジータを母星とする戦闘民族サイヤ人の第2王子ターブルであることも思い出せた。

——それと同時にターブルが融合したモノについても推測できた。

それはおそらく、この世界を“ドラゴンボールの世界”と認識する異世界の何者かの“知識”だ。

当初はその人格ごと融合した錯覚にとらわれかけたが、それならばあるはずのその個人の記憶や感情がまったたくターブルの中に存在しないことから、どうやら知識のみが入り込んできたらしい。

(分からないのは、どうしてそんなモノが入り込んできたかだが……。きっかけは、ボクが頭を打って意識を失ったことぐらいしか考えられないな)

ターブルはこの星を制圧することを使命として惑星ベジータから送り込まれていた。

もつとも、彼自身に星を制圧するつもりはなかったのだが、それでもサイヤ人の悪名はこの星にも伝わっていたらしく、到着と同時に星の住民から手荒い歓迎を受けることとなった。

どうにか逃げおおせはしたものの、攻撃を受けたことで空を飛んだまま意識を失い、かなりの高度から崖下まで落下してしばらく昏倒していたのだ。

落下した際に強打した頭や逃走時に攻撃を受けた箇所を触れてみるも、どこも既に回

復したらしく、傷も痛みもなかった。

(ま、頭に色々知識を入れてもらえたんだから、ヤツらの襲撃にも感謝するぐらいだ。なにやら今のボクには面白い知識が山ほどあるらしいし……)

右の拳を軽く握り、小さなエネルギー弾を作り出す。サイヤ人である彼には当然の芸当だ。

だが、戦闘センスに頼るサイヤ人にあまり見られない『気功術』という知識が今の彼の中には存在していた。

肉体と並んで戦闘力の指標になる気——体内に内在するエネルギーの類——のコントロール術。それをマスターすれば無駄な消耗を抑えることも瞬間的や集中的に出力を絞り、最大戦闘力を遥かに向上させることも可能だ。

是非とも会得したい技術である。

(さて、今年地球の歴でいうところのエイジ738……だったか? たしかフリーザが惑星ベジータを滅ぼす時期がそろそろだったな。そして、あの『孫悟空』が生まれる頃でもあるというわけだ)

ターブルが持つ知識は、この世界が辿るだろう歴史の1つとって過言ではない。

そして、その歴史の中心は孫悟空こと地球育ちのサイヤ人・カカロットが刻む超サイヤ伝説とも言える代物で、彼が宇宙の帝王フリーザを倒し、人造人間や魔人をも超えて

いく戦いの記録でもあった。

そのため、悟空がどういう敵と戦い、いかにして強くなっていたか……そのほとんどが歴史という形でテーブルの頭にあつた。

もつとも、それは正確無比なものではない。

その証拠に……孫悟空が生まれ、またフリーザが惑星ベジータを破壊した年はエイジ737。既にサイヤ人は滅ぼされているのだ。

テーブルは右手にエネルギー弾を浮かべたまま、左手でスカウターを取り出し、そのまま左目に装着する。

（ボクの戦闘力……記憶にある限りでは計測した覚えがないが、どの程度なんだ？）

スカウターとはサイヤ人や他の惑星戦士達が常備している道具で、超長距離の通信機能と生体探索機能を有している。

生体探索機能は対象となる生体の戦闘能力を肉体強度や体内エネルギーから総合的に計算して数値化し、スカウター使用者との距離やその方角を正確に計測することが可能となっている。

その有用性から、探索機能としてではなく相手の強さを探るための測定器としての使用も多い。

テーブルの持つスカウターは現時点での最新型であり、戦闘力も15000程度まで

が計測可能な代物だった。

（父さんにも兄さんにも、戦闘力については何も言われていない。なら少なくとも下級戦士よりはマシンなはずだ）

今の自分に戦闘力のコントロールなどできるわけもないのだが、通常時と臨戦態勢時では戦闘力に差が出る可能性はある。だが、こうしてエネルギー弾を維持した状態ならば限りなく戦闘時と同様の戦闘力が測れるはずだ。

そう考えたターブルはそのままエネルギー弾にどんだん力を注いでいく。

果たして、そうやって計測された彼の戦闘力は4200だった。サイヤ人でも大人のエリート戦士に相当する戦闘力だ。

「……元々、これぐらいは出せたのか？ それとも得体のしれないモノが混ざったせいかな？」

エネルギー弾を消してスカウターも外したターブルは少しの間、思索する。

兄のベジータは5歳で強化型の栽培マンをゴミのように消し去り、何歳かは知らないが子供の頃に父王の戦闘力を越えていたという。

それを思えば約3歳とはいえ、自分の戦闘力も決しておかしい数値ではない。

とりあえずの現時点としてはターブルとしても満足のいく戦闘力数値ではあった。

（とはいえ、ついさつきも手痛い目にあわされて意識を失う失態をしているわけがな。

父上も住民の戦闘力が低いか、比較的平和であろう星に送り込んでくれたんだろうが……)

ターブルはこの星へ送り込まれた経緯と、送り込んだ張本人である父・ベジータ王へ
と思いを馳せた。

サイヤ人において、赤子や幼子を惑星攻略に単独で送り込む行為を『飛ばし子』という。

飛ばし子は主に戦闘力の低い下級戦士のさらに落ちこぼれが対象で、女は子供を産めるために対象から外れている。彼らは惑星の侵略に成功して再び惑星ベジータに戻ることができれば、その気性や戦闘センスに見所があると見なされてあらためて仲間として迎えられる。

だが一方で返り討ちにあつてそのまま戦死する可能性の方が高く、本来は選別のための行為なのだが、実質は間引きの意味合いが強くなっている。

また、遺棄のために息子を飛ばす父親もおり、そのことから一部の温厚なサイヤ人からは残酷な行為と忌諱されていた。

ターブルもそうやってベジータ王自らの手で飛ばされており、その為に王子であるにも関わらず、サイヤ人でもその存在を知る者はほとんどいない。

彼を知る者は一部の側近ぐらいだが、その側近でさえターブルが落ちこぼれとして王

に遺棄されたと思っていた。

だが、テーブルが他の一般的な飛ばし子と違う点が2つあった。

1つは性格が穏やかであることから戦闘に不向きと見なされたが、資質を測る最大の要素である戦闘力は王族由来の非常に高い物を持っていたこと。

そしてもう1つは、そもそも選別や間引きや遺棄のために辺境へと追いやられたのではないことだ。

ベジータ王はサイヤ人の中でも特に残酷で冷酷な性格だったが、そんな王でも親の情は持っていた。気質はともかく十分な戦闘力を持つテーブルを自らの血を引く息子と見なし、愛情を抱いていたのだ。

だからこそ、次王としてサイヤ人を背負う宿命を持つ長男ではなく、次男であるテーブルにはサイヤ人の生き方を捨てても生き延びて欲しかった。

そうしてテーブルはその存在を抹消される形で飛ばし子として密かに辺境へと送り込まれたのである。

なお、テーブルの存在を知る一部の者については王の近衛以外は口封じで殺されており、それ以上の外部へと漏れることはなかったという。

そうまでしてテーブルを逃がしたベジータ王だが、王にその決断をさせたのは近く敵対するつもりでのフリーザの存在だった。

フリーザを倒すことができればサイヤ人は宇宙に君臨できるだろう、だが倒せなければ逆にサイヤ人そのものが絶滅しかねない。

だから、前者の未来にはフリーザにも買われているベジータを、そして後者の未来にはフリーザも存在を知らないターブルを、それぞれの希望として遣そうとしたのだ。

そんな父の真意を、惑星ベジータ消滅の真実を知った今のターブルは理解していた。（色々考えてこの星に送り込んでくれたのだろう……だけど、悪いが住む星は自分で決めさせてもらう）

懐からコントローラーを取り出す。ターブルの宇宙船ポッドの遠隔操作作用のリモコンだ。

2、3回ほど簡単なボタン操作をしてしばらく——遠くの空から1機の丸型の宇宙船がこちらへと向かって高速で飛んできた。

（よし、流石に追手はついてきていないな……）

丸型ポッドはターブルがいる場所の近くに来ると速度を落とし、リモコンであらかじめ指定した座標地点にゆっくりと着陸する。

（さて、行先の設定をしてから飛び立つまでの間に追手がこなければいいが……）

半日ほど前には来訪したターブルを手荒く歓迎してくれた現地民達。彼らは丸型宇宙船ポッドの起動により、ターブルが生きていることを察知しただろう。

ならば、彼らはその軌跡を追いかけてここまでやってくるに違いない。問題は距離とここに着くまでの時間だ。

テーブルは再びスカウターを左目に装着して生体反応を探索、戦闘力数値とこちらとの距離を計測する。

「戦闘力500前後の反応が20以上の数か……。その中でも最も強い反応で戦闘力622……」

テーブルは嘆息した。この程度の戦闘力の連中に自分は不覚を取ったのかと。

確かに現地住民は光線銃で武装をしていた。だが、それはサイヤ人が傘下に入っている軍団の武装とは比較にならない程の貧弱なものだ。その光線銃も装着者の気を増幅する機能は持たず、あくまで気を変換してビームとして放つのみ機能のようだった。おそらく連中はエネルギー波の類を使えないに違いない。

（ますます不覚を取る要因がないな。驚き、怯え疎んで力のほとんどが出ない状態でしやられたんだ、我ながら情けない……）

嘆く間に計測された距離は思ったよりも近かった。彼らの移動速度から察するにあと5分もしないうちにこの場所まで辿りつくだろう。

脱出が先か到着が先か、際どいタイミングだ。

「発射から大気圏離脱までの間に集中砲火でも受けたら面白くないな。……あれを使う

か

テーブルは宇宙ポッドから小さな瓶を2つ取り出し、それぞれからいくつか種を取り出して土に埋めていった。そして瓶に同梱されていた専用の液体を種を埋めた土の上に落として数秒、種から育ったインスタント戦士が土から生えてきた。

「生まれたな、貝割マンに球根マン。ボクが宇宙船でこの星を離れるまでの間、ここへ向かって来る手を足止めしろ。ただし、殺すんじゃないぞ……」

カイワレマンにキュウコンマンはどちらもサイヤ人の科学者が開発した戦闘用の生物兵器、インスタント戦士だ。彼らは見た目は同じだが体色に違いがあり、カイワレマンは水色でキュウコンマンは橙色となっている。インスタント戦士には他にも数種類が存在し、シリーズの中で最もポピュラーなタイプは緑色の栽培マンである。

彼らの特徴として、生まれるまでが早いのが寿命もまた短い。ごく稀に生き延びて野生化する個体もいるが、ほとんどが数日で寿命を迎えるという。

そして肝心の戦闘力は、この星の土壌でカイワレマンが戦闘力300、キュウコンマンが戦闘力400だった。

（土壌次第ではどちらも戦闘力1000近くまでになるんだが……この星の土はあまりインスタント戦士を育てるには向かないらしいな）

インスタント戦士が迎撃へと向かうのを見届けるとテーブルは宇宙船ポッドへと戻

り、内部のモニターを操作する。コールドスリープ装置の起動準備をして、行先の星を設定する。目標は北銀河の外れ、地球だ。

「せっかくだし行かせてもらおうさ、地球……。戦いと冒険と『ドラゴンボール』がある星。超ワクワクしてくるじゃないか……。！」

到着予定まで1年と出ると、そのままターブルは乗り込んで宇宙船ポッドを発進させる。カイワレマンやキュウコンマンが上手く足止めしているのだろう、発射の際の妨害はなかった。

そうして無事に旅立ちが始まり、ターブルは地球へ思いを馳せながら長期のコールドスリープへと入った。

次に目覚める時は地球を目前とした時だ。その時の彼はそう思っていた。
だが……。

* * * * *

「いきげんよう、サイヤ人のガキ」

目覚めたのはコールドスリープからたった数日の後だった。

宇宙船ポッドによる緊急信号で強制的に覚醒させられたターブルに、ほぼ時間を置か

ずに通信が入ってきた。

通信先はターブルの宇宙船ポッドの横をピツタリと並走する小型の宇宙船からで、その中にはターブルと同じくらいに幼い少年の異星人がこちらを窺っていた。

水色の体色に青のボディースーツ、赤いラインの入った黄色いジャケツト……。ターブルはその特徴から目の前の異星人に思い当たるものがあつた。

「お前は、ま、まさか……！　だが、何故……!？」

「ほう、意外だな。このオレが何者か察しがついているらしい……。だが、オレ様の目的までは分かるまい？」

「ツフル人がいったい、何の用だ！　サイヤ人への復讐か！」

「違うな。既にフリーザに滅ぼされ、いずれ生き残りも死にゆくだろうサイヤ人への復讐などではない」

「なにつ!？」

「お前のサイヤパワーが欲しいんだよ。お前は幼体とはいえサイヤ人、その肉体はオレが乗り移るのに打ってつけなのさ」

相手の正体は、数年前にサイヤ人が滅ぼしたツフル人の生み出したマシンミュータント・ベビー。ツフル王の遺伝子から生まれた、いわば新たなツフル王だ。

ターブルに宿る知識によれば、遠い未来に彼の兄・ベジータの肉体を奪い、惑星ベジータ

タの旧名である惑星プラントをツフル星として復活させて全ギヤラクシーを掌中にせんと目論むという、宇宙の帝王フリーザに次ぐサイヤ人の宿敵といえる存在だ。

そんな少年体ベビーが今、ターブルの宇宙船ポッドへと向かおうと自らの小型宇宙船の扉を開いていた。

「ふっふっふ……。宇宙へ出た途端にオレに目をつけられるとは、運が無かつたな」

まさかの遭遇にターブルは齒噛みした。こんな形で最悪の相手に狙われることになろうとは想像だにできなかった。

戦闘生命体にして寄生生命体であるベビーは寄生対象の細胞に乗り移り、そのまま肉体を乗っ取ってしまう能力を持つ。宇宙空間では逃げ場はなく、一度寄生されたら仮に追い出せたとしても卵を産みつけられて支配下に置かれてしまう。

近くにはサイヤ人が変身を可能とするための月は存在せず、太陽が見えるのみ。状況はまさに絶体絶命、万事休す——。

「……ハハッ。いいや、違うな。ツキは十分にあるじゃないか」

「なんだ？ 気でも違ったか？ お前達のこととは全て分かっている。この近くに大猿になるための月はないぞ？」

焦りの表情から一転して笑みを浮かべるターブルを訝しんだベビーは探りを入れるが、反応は笑みを浮かべたままの沈黙で要領を得ない。

妙な話の食い違いぶりは気になったが、結局はただの開き直りとベビーは判断する。

だが、そんなベビーの内心を知ってか知らずか、さらにターブルは鼻で笑った。あからさまな挑発だが、その態度にベビーは激しく苛立った。

「お前がサイヤ人の王子であることは分かっているんだぞ、ターブル！ お前が落ちこぼれだということもなあ！ だからこそ、お前の身体を狙ったのだ！」

「こつちだつてお前のことはお見通しなんだよ、ベビー！ そしてボクは戦闘力は落ちこぼれじゃない！ だから、お前はここでお仕舞いだ!!」

（舐めた口を叩きやがって！ そのまま吸収してやるか……いや、エネルギー波の一発でも撃たせて気を上げさせてから取りついてやる！）

（ベビーは相手にダメージを与えて傷口から侵入するか、気を放出・発散させた隙に取りつこうとする。だからこれは賭けだ。戦闘力をコントロールしてヤツの想定を超えた一撃を放つ!!）

戦闘力のコントロール。

その知識こそあるが、やり方などが正確に分かるはずもなく。だが、己の戦闘センスを信じた。

ターブルは身体を左方向に振りかぶる様に捻り、右手の甲に左手の平を添え合わせ、渾身の力を右手に集中させて振り絞る。

そして宇宙船ポッドの扉を蹴り開き、すかさず必殺のエネルギー波をベビーへと放った。

「吹き飛ばえーっ!!」

「なにつ!」

まったくの未完成体である少年体ベビーには、戦闘力を集中して高められたターブルの『ギャリック砲』に抵抗する力はなかった。

真正面からギャリック砲を叩き込まれたベビーはそのまま小型宇宙船から弾き飛ばされ、エネルギー波の奔流に流される。

しかし、ベビーは高度なツフルの科学により作られしマシンミュータント、彼を破壊するのは今のターブルのパワーでは到底不可能だった。

「無駄な抵抗だな、サイヤ人! ガキの身でそれだけの気を持っているとは予想外だったが、今の攻撃でお前の力はガクンと減ったぞ! お前のその身体、すぐに奪ってやる!!」

「……言っただけで、ベビー。ツキがあるってな」

「何を……っ、うおおっ!」

押し流されている先を振り返るベビー。

その目に映ったのは付近に唯一、存在していた星——太陽だった。

「し、しまった！ おのれえ、だがこんなもの逸らしてしまえば……く、くそつ！ 逸らせないだとおつ!？」

「欲をかいたのと急ぎ過ぎたのが敗因だな、ベビー。本当なら、お前もつとやれたヤツなんだろうが……近くに太陽があつたとは、ツキがなかつたな」

「リ、リベンジ・ブラ……、チツ……チクシヨウワー……!!!」

いかに強靱で細かな破片からでも再生して生き延びられるボディであつても、太陽に落とされてはひとたまりもない。

ターブルが知る歴史における末路によると、ベビーは乗り込んだ宇宙船ごと太陽に叩き込まれて死んでいったという。その末路と同様にするべく、ターブルはベビーの乗っていた小型宇宙船へもエネルギー波を放ち、太陽へと押しやる。

そうして、太陽へと沈んでいくベビーと彼の宇宙船を見届けて、ようやくターブルは安堵して宇宙船ポッドへと戻った。

（ボクがああの星を出たのと近くにベビーが航行していたこと、偶然が重なると運命なんてこうもあつさりと変わるものか。けど、一步間違えばここで消えていたのはボクの方だったんだ……）

実際、危なかつたのだ。

本来であれば、あのベビーはとても勝ち目がある敵ではなかつただろう。全力のギャ

リック砲でもベビーにダメージを受けた様子が見られなかったのがその証拠だ。

相手の油断とこちらが実力以上の力を発揮できたこととその他の幸運が重なった、そんな薄氷の勝利だった。

遠い未来、兄・ベジータの肉体を乗っ取って全宇宙の人類をツフル人化しようと目論むはずだった悪魔の思わぬ最期……。

図らずも、現在向かっている地球の未来の危機を救った形となったのだろうか？

そんなことを思いながら、今度こそ地球へ着くまでのワールドスリープに入るターブルだった。

其の2 AGE739：侵入！サイヤ人

地球へ向けて出発したターブルはコールドスリープによつて長期の睡眠状態に入っていた。

その睡眠状態の中でターブルは夢を見ていた。夢の内容は例の“知識”にある出来事の追体験というべきもの。

孫悟空や孫悟飯、クリリンやピッコロにベジータ、トランクス——彼らZ戦士達の視点を目まぐるしく変え、数々の戦いが映像として伝えられる。地球を中心とした激戦は、時にナメツク星や様々な星々を巡ることさえあった。

さらに魔人ブウとの戦いから後になると、枝分かれした違う歴史の記憶までもがターブルの頭に流れ込んできた。破壊神や復活したフリーザが現れた世界、ベビーや超17号や邪悪龍が現れた世界、そして大猿を率いたピッコロ大魔王にネオピッコロが現れた世界……。

（——これらは何者による知識なんだ？　そしてボクに何を伝えようとしているのか？）

そんなターブルの問いかけにも、答えとなる知識も記憶も流されることはなかった。

一方、テーブルへと流されるのは知識や記憶の映像だけではなかった。

宇宙船ポッドによる自動学習機能も働いて、テーブルに様々な惑星についての情報や基本的な戦い方などのサイヤ人としての常識を与えていった。

学習機能にインプットされた内容はベジータ王による温情で通常のサイヤ人よりも数段高度な教育だったが、ツフル人かフリーザ軍の科学力は幼子にも正しく知識を植えつけた。

そして、それらはテーブルに自らの生きる指針を決めさせるには十分なものだった。

知識を得た瞬間から本能的に決めた地球行きとおぼろげに浮かんでいた自らの生き方が、サイヤ人として目覚めていくにつれて確固たる形になったのだ。

(知識によって様々な強さを見せられ、夢想したボクの理想形は——。ボクが至るべき高み、強さ、その姿は——！)

金と赤と青の輝きが強さのイメージとして次々と浮かびあがり、やがてそれらが混ざりあつて一つの強さの『答え』が導き出された頃……。これまでに無かった知識の奔流がテーブルの頭に流れ込んできた。

(これは、何だ……!? まるで今までのものとは違う……!?)

流れてくるのはそれまでと違い、とぎれとぎれな映像に断片的な声のみで、そして今までに見たことのないものだった。これこそが、テーブルに知識を与えた者の記憶なの

だろうか。

『究極神龍！^{シエンロン} 世界を……世界を元に戻してくれ！』

現れた映像は、ぼろぼろになった天界に浮かぶ赤い神龍と一人の見知らぬサイヤ人の青年の姿。

この声は青年のものだろうか？ 世界を元に戻すとはいったいどういう意味なのか？

『神龍！ 最強の武道大会を開いてくれ！』

映像はとぎれて切り替わり、今度はこれまで出てきたことのない場所にいる神龍と少年達へと場面が変わる。そして少年の願いを受けた神龍によって、時空が混ざり合った世界が生まれる。

ならば彼らが、青年の言った世界を元に戻さなければならぬ元凶なのだろうか？

これらの記憶から分かるのは、今流れているモノがこれまで見てきた世界とはまた別の世界の出来事だろうことだ。

“ドラゴンボールの世界”と認識している異世界の者達とは、おそらくは彼らの誰かに違いはない。

だが、それならば何故、どちらもの映像が流れてきているのか。2つの異世界は同一のものなのか？ サイヤ人の少年ピニッジとサイヤ人の青年が同一人物なのか？

1つの謎に答えらしきものが導き出されると同時に新たな謎が浮かびあがってくる。

おそらくはこの世界に彼らの身に起きたものと同様の出来事は起きないのだろう。

ならば、ターブルに彼らの知識が流れた理由は、原因は何なのだろうか？

答えの出ない謎に思考が堂々巡りを始めた頃、ターブルを起こさんとコールドスリープ解除の報せが船内に鳴り響いた。

* * * * *

辺境惑星からターブルが出発して約1年が過ぎた頃、ようやく彼を乗せた宇宙船ポッドは地球へと到着しようとしていた。

降下ポイントは地球の東部エリア、東の都からやや西の地点。そこにターブルの宇宙船ポッドは飛来した。

(頼むぞ、安全な場所に落ちてくれ……！)

ターブルの願いが通じたのか、宇宙船ポッドは人気のない荒野に落下して半径10mほどのクレーターを作る。すぐにターブルは宇宙船を降りて上空へと浮かび、周囲を見渡す。どうやら運良く人が住んでいるような地域は避けられたらしい。ターブルは安堵の息をついた。

サイヤ人ら惑星戦士が乗る宇宙船には種類がいくつもあるが、ターブルの乗っているような1人乗りタイプの丸形ポッドは『アタックボール』の異名を持ち、対象惑星への攻撃兵器としての一面を持っている。その性質上、降下自体が惑星への攻撃を兼ねており、特殊な着陸施設がない限りはどうしても周囲に被害が出てしまうのだ。

地球の詳細な地図も無く、細かい落下地点の修正なども出来ないため、ターブルも星への降下については運頼みにせざるを得なかった。

もつとも、そのことには到着間際まで気付いておらず、それからの数分間、被害が出ないかとヒヤヒヤしていたのだが。

「……が地球……なるほど、情報通りのいい星だな」

気を取り直して地球を見渡せば、荒野の向こうには緑に溢れた大地や山々が広がっていた。

文明レベルこそ低くて資源もろくに無いが、食料は豊富で外敵に狙われにくい平和な星。地球は居住するにはうってつけの星だった。

（この星を狙うようなヤツはサイヤ人どころかそこの惑星戦士を探してもいるまい。……ああ、違うな。カカロット、いや孫悟空がとつくに到着しているんだつたよな）

孫悟空は惑星ベジータが滅びる直前に地球へと送り込まれており、距離から考えても既に地球に到着しているはずだ。フリーザの侵略直前、悟空の父・バーダックの帰還と

すれ違うように赤子の彼は飛ばされたのだから。

……そのはずなのだが、悟空が2歳か3歳の頃にバーダックによってフリーザの侵略前に逃がされたという情報も同時に頭によぎったため、正直自信はないのだが。

(まあ、それはいいさ。そんなことより、さっそく行動開始といこうじゃないか)

ターブルが地球を住処と定めた理由の1つに地球独自の武術や気功術を学ぶという目的があるのだが、その前にとりあえず目先の問題をいくつか片づけなければならぬ。

まずターブルが考えたのは宇宙船ポッドをどうするかという問題だったが、実はこれについてはアテがあった。

この星には『ホイホイカプセル』という、物質を粒子状に変換して収納する便利な道具があり、それを使えば宇宙船ポッドを小さなカプセルに入れて持ち運ぶこともできるのだ。文明レベルが高くない地球にしては例外的に高度な発明品であり、ターブルとしてもどうしても欲しい道具だ。

だが、それにはホイホイカプセルを購入する現地のお金が必要となる。

ついでに、お金がかかるだろう問題がもう1つある。現在、身に着けている戦闘ジャケットのままではどこへ行くにも目立ってしまうので、出来るだけ早めに地球の服を調達する必要があった。

「サイヤ人の流儀からすれば、ここは略奪なんだろうが……そういうわけにもいくまい。仕方ない、働いて稼ぐとするか」

渋々ながらターブルはそう決断した。彼が子供であることを除けば、至極当然の判断だ。

だが、実はこれは戦闘以外ではあまり働かないサイヤ人の戦士としては極めて珍しい考え方だったりする。

温厚な性格のサイヤ人戦士も珍しいが、まともに地道な労働で賃金を稼ごうとするサイヤ人戦士ともなると、もはや異端の存在といつて過言ではないのだ。

今のターブルはかつて以上にサイヤ人としては異端の存在となりつつあった。

（さて、宇宙船ポッドをこのままにしておくわけにもいかんが、お金を得るには人の居る場所まで行かんとどうにもならんな）

宇宙船ポッドを降下地点のクレーターごと土で埋めて隠した後、ターブルは最寄りの街である東の都へと向かった。

ホイホイカプセルの購入費用を働いて稼ぐことに決めたターブルだが、その前にカプセルの値段や種類についての下調べが必要と考え、カプセルを買い求める街へと向かうことにしたのだ。

（地球の街か……どんなものか楽しみだな。この服装だと目立つだろうし、地球人との

ファーストコンタクトもあるかもしれない)

実のところ、1年ぶりの目覚めと平和な地へと逃れてきた自由にテーブルは浮かれていた。彼もまだ小さな子供である。地球の文化や地球での出会いに胸を膨らませていたのだ。

だが、ここからがこの日のテーブルにとって災難の連続だった。

東の都へ舞空術でそのまま入るや否や、テーブルめがけて彼の下方向から次々と何か飛んできたのだ。

「な、なんだ?! 地球人の攻撃か?!」

テーブルの周囲に飛んできた複数の物体が次々に爆発する。その1つを爆発前に空中で掴んだものの、突然の出来事に驚いたテーブルは慌てて舞空術を解いて、真下の道路へと降り立った。

「攻撃……いや、違うな。なんだ、こいつはただの花火か」

掴んだそれをよく見ると、飛んできた物体の正体はロケット花火だった。どうやらすぐ近くにある公園から飛ばされたものらしい。

テーブルめがけて飛んできたのはどうやら偶然で、間が悪かったらしい。

(偶然とはいえ、こんな危なっかしいモノをぶつけやがって。サイヤ人の王子ともある者が、ほんのちよつとだがビビったじゃないか……!)

実は無茶苦茶ビビらされたことへの怒りに任せて、文句の一言でも言つてやろうかと公園へ向かおうとしたターブルだが、それは思わぬ形で遮られた。

「いーい、そのひこう少年！ 待ちなさいー！」

降り立つた場所が車道の範囲内だったことから、近くに居合わせた婦人警官が走つてきたのだ。呼び止めた言葉は『飛行』と『非行』をかけたのだろう。どうやら地球人はギャグのセンスはあまり無いらしい。

どうあれ地球へ来て早々に警官と揉めるのは面倒だしよろしくないと、ターブルは呼び声に従つて立ち止まった。

「いーい、ボク？ 道路に急に飛び降りたりしたら危ないでしょ。人によつてはトラツクに轢かれて死んでしまうこともあるのよ。それに、空を飛んでもキーンって走つても、スピードは守らないとダメよ？ パトカーを撥ねちゃうことだつてあるんだから」

どこからツツコミを入れればいいのか分からない注意だったが、一応の言い分は正しい……はずだ。キーンと走つた覚えはないのだが、きつとこの婦人には覚えがあるのだから。

ならば、人に向けて花火をあげるのはいいのかと言おうかとも思ったが、どうやら彼女はターブルを見つけて急いで走つてきたらしく、彼めがけて飛んできた花火について

気付いていないらしい。

それについて伝えると余計に話が長くなりそうだし、そうなるのは面白くないと考え直し、ターブルは素直に頷いておくことにした。

「降りてきたり、歩くのは歩道にするのよ。そして車が走ってる道路を通る時には横断歩道を渡るの。分かった?」

「はい!」

「よし、いい子ね。エライエライ! じゃ、お巡りさん行くからね! バイちゃー!」

「バイちゃー!」

ターブルの頭を優しく撫でて婦警は去っていった。そしてそれを笑顔で手を振って見送ったターブルだが、彼女の姿が見えなくなると怒りを露わにした。

(くっそく、余計な時間を食わされた! それもこれもロケット花火をぶつけてきたヤツのせいだ! 何がバイちゃだ、ここはペンギン村じゃないんだぞく!!)

地球へ来て早々にギャグキャラに落とされそうになっている現状にターブルは恐れを抱いた。

兄・ベジータは最低でも10年以上はかかったというのに、自分は数時間も経たないうちにこのザマとは想定外もいいところだ。

おそらく今の時期の地球は平和ボケしやすいのだろう。ほんの1話……いや1年前

には殺し合いをしていたとは思えない状態だ。

（とにかく、ロケット花火だ！ あれを放ったふてぶてしいヤローに一言言わんと、サイヤ人として先には進めん!!）

色々なものをない交ぜにした怒りを抱えてターブルはついに公園へと辿りつく。

だが、そこにいたのはターブルの想像とは違って、少年と少女の2人だけだった。近くには打ち上げようとしているロケット花火が多数置かれている。

（ちよつと思つてたのと違うが、どうやらこいつらが犯人で間違いないらしいな……）

直接はさっきの婦警だが、間接的には彼らの方が先に接触した相手。とんだ形での地球人とのファーストコンタクトだ。しかも、ターブル自身も子供とはいえ、子供が最初の接触対象とは思ひもしなかった。

「お……」

「おーい！ おめえ達、危ないだろ！」

ターブルの言葉を遮り、彼が発しようとしていたはずの言葉が別の方向から飛んできた。

少年少女とターブルの3人が同時にその声の方を向けば、彼らよりもだいぶ年上らしき少年の姿があった。彼は自らを通りすがりの消防隊員を名乗った。

「おめえ達、ちよつとした不注意が火事の元になるんだぞ！ 花火をする時は3つのこ

とに気をつけなきゃいけない。大人と一緒にすること、燃えやすい物のない広い場所ですること、そして水の入ったバケツを用意することだ」

(えつと……こいつ、サイヤ人の子供じゃないよな？ 下級戦士にいるタイプと似たような顔してるが……)

サイヤ人の下級戦士によくいる顔立ちにそっくりだが、少年はどうやら間違いなく地球人の消防隊員らしい。

花火を打ち上げた犯人の少年少女と一緒に何故かターブルまでが消防隊員の少年に説教され、ついでに防火の心得を説かれた。

「あとで」より「いま」が大切 火の始末」

「消えたかな！ 気になるあの火 もう一度」

「怖いのは「消したつもり」と「消えたはず」」

「よし。おめえ達、火遊びはもうするんじゃねえぞ！」

消防隊員は最後にそう注意すると去っていった。少年少女は意気消沈した表情で、そしてターブルは呆然としたまま、彼を見送っていた。

……まさか、地球で最初に学んだ常識が防火の標語になるとは想像だにできなかった。最初に学んだルールは「ルールがないということ」とはならなかったのである。

たしかに例の知識にもサイヤ人の学習装置にも無い情報ではあったし、一般的にはタ

メになる心得でもある。

……宇宙でも有数の強戦士族たるサイヤ人でもなかったら、火事は脅威なのだから。(色々な意味で醒めたな。思い返せば、ムキになることでもなかった。頭を冷やせてよかった)

先程までの怒りや苛立ちがいつの間にか困惑で鎮火されていた。これも消防隊員の実力ならば恐るべしというべきか。

そんなことを考えながらぼんやりと立ちつくしていると、少女が話しかけてきた。

「さつきはごめんなさい、巻き込んだじやって。私はチャオ、こつちの子は私の弟」

「ぼくはパオズ。さつきはごめんね。君の名前は？」

「あ、ああ。ボクはターブル」

「あなた、見慣れない格好ね。この町の人？」

「いや、この街にはホイホイカプセルを見に来たんだ。そのうち買うつもりで、いくらぐらいうるか知りたいんだ。君ら、カプセルを売ってるお店の場所を知らない？」

「ふーん、でも僕達は知らないなあ」

「近くにお巡りさんがいたから、お巡りさんに聞けば連れてってもらえるわよきつと」

盲点だった。さきほど出会った金髪婦警にカプセルを売っている店まで案内してもらえばよかったのだ。文句を言おうと頭に血を上らせて考えもしなかった。

「さっきのお詫びにこのドラゴンケースをあげる。カプセル買ったならこれに入れておくと安心だよ」

「あ、ありがとう……」

ロケット花火の件で怒られたお詫びにと、パオズがカプセル用のケースをくれた。

（ふふん、地球人も悪くないじゃないか……。うん、さっきのことは水に流そうじゃないか）

ターブルは笑顔で手を振ってチャオとパオズの姉弟と別れ、公園を離れる。

つい数分前までの怒りもどこ吹く風か、初めての地球人からの贈り物にあっさり心変わりをして上機嫌のターブルだった。

なお、彼は後に至るまで気付くことはないが、ドラゴンケースは目薬入れである。

チャオの助言に従ってさっきの金髪婦警を探してみれば、彼女はまだ近くにいたらしく、すぐに見つかった。

「車泥棒に空き巣に銀行強盗まで捕まえたのよ、すごいでしょう?」

婦警の自慢を話半分に聞き流し、彼女にカプセルを買おうと店を探していると事情を話すと、カプセルを売っている店まで一緒に連れて行ってもらうこととなった。どうやら先に知り合っていたことは無駄ではなかったらしい。

「ここがカプセルシヨップよ。車が入るサイズって言うてたわよね……。だつたら、この辺のものじゃないかしら」

テーブルは漠然とカプセルの値段について当たりをつけていた。

ホイホイカプセルの相場は不明だが、必要なのは空のカプセルだ。そこまでの金額になるとは考えにくい。彼の有り余る戦闘力で1日か2日ほど力仕事で日銭を稼げば、それで問題ないはずだ。

そう思っていたのだが……。

「ご、5万ゼニーだとお!? い、いったい何日間働いたらいいんだ……!?!」

テーブルはその値段を見て愕然とした。5万ゼニーとは日本円にすれば7万5千円である。

後に兄・ベジータの会社になるであろうカプセルコーポレーションの商品が、よもや今の彼を苦しめることになるうとは。

天を仰げば、空には見下した笑顔を浮かべる兄の姿が思い浮かび、テーブルの胸の内にもちよつと激しい怒りがこみ上げた。

(……今この感覚は覚えておこう。いつか伝説の超サイヤ人になる時のために)

これもきつと後に役立つはずだ。出会った婦警も姉弟も、今日という日はそうだったのだから。

そう思い込むことで怒りを鎮めるテーブルだった。

* * * * *

——時はやや遡り、東の都の隣国にある王城へと舞台は移る。

その城の奥深くに位置する玉座の間は、その名から連想される華やかさとはかけ離れた異様な空間だった。

玉座の間は高い天井に太い柱が立ち並んだ広い空間だが、そこには豪華なシャンデリアが飾られることもなく、石造りの床には真つ赤な絨毯が敷かれていることもない。唯一、出入り口の扉両側の壁に国の紋章が入った赤い布がかけられているぐらいか。

さらに室内にも門前にも衛兵や近衛の1人さえおらず、灯りも消えていることで窓もない部屋は薄い闇に包み込まれている。

そんな薄闇に静まり返った室内で1人、玉座の手前でうずくまっている男の姿があった。

その男は城の主でありこの国を治める王だったが、かつては携えていただろう威厳も風格も既に消え、今や見る影もなかった。

「お、おとおおつ……ぐぐつ、ぐうう……」

苦しげに呻き声をあげる王の様子を見てのことか、閉ざされた出入り口の扉に影が浮かびあがり、そこから声が響いた。

《——苦しいか、王よ?》

「う、ううう……! く、苦しい、助けてくれえ……!」

王が呻き、影にすぎる様に声をあげる。影はその王の様子に、楽しげに続けた。

《王よ、苦しいか? 我らに助けを乞うか?》

「た、助けてくれえ……! このままではワシは死んでしまおう……つ!」

《ならば我が意に従え。以前もそれでお前はいい目をみただろう? さあ今一度、我らに忠誠を捧げるのだ》

影の正体が悪魔であることを王はとうに悟っていた。

かつて、一度だけ王は誘惑に乗ってしまい、その際に王は莫大な富と力を得ていた。

——その時にその時に分かってしまったのだ。

そして、王は今、自分を苦しめているものがその代償であることも薄々ながら気が付いていた。

だから理解していた。ここでこの誘いに屈してはならないことを、ここで屈しても何の解決にもならないことを。

「な、何をすればいい……。今度は、何をおお……!」

それでも。理解していてもなお、悪魔に植え付けられた呪いは深く、苦しみは耐え難かった。

《国中を挙げて探すのだ。世界に散りばめられし7つの宝珠、神の龍を喚びだせし秘宝……ドラゴンボールを!》

「ド、ドラゴンボール……! ドラゴンボールを、ドラゴンボールを我が前に捧げるのだあゝ!!」

そうして、ついにその正体を知りつつも王は悪魔の奸計に屈してしまった。

狡猾な悪魔によつて踊らされる王と国が、世界をも揺るがしかねない事態を巻き起こそうとしていた。

其の3 赤の宝石と龍球

ホイポイカプセルの下見を終えて東の都から飛び立ったテーブルは、この付近のどこかにあるだろう村を探していた。

彼が今、求めているのは戦闘ジャケットに代わる衣服と寝床だが、どこか適当に見つけた先の村に入り込んでそれらを恵んでもらおうという腹積もりだった。無論、恵んでもらえない場合のことも想定しており、その場合は力仕事で働いて稼ごうとも考えているのだが、一方で宇宙船ポッドを収納するカプセルを貰えないかという都合のいい期待もしていた。

ほんの数時間前まではお金を稼いで買おうとしていたカプセルの値段は当初の予想をはるかに上回り、テーブルに逃避めいた願望を持たせるほど高額だったのだ。

カプセルをどうやって手に入れるかは今やテーブルの一番の悩みの種となっていた。(カプセルのことはともかく、どうにかして衣服と寝床は調達しなきゃいかな。その後のことは最低限のものを得てからの話だ)

そんな風に思考を切り替えようとして、最低限のものという言葉から今の今まで気にもしてなかった、ある大事なことに気がついた。

衣食住——最低限の生活の基本の1つ、食事をこの1年間とつていかなかったのだ。

(ゴールドスリープに入っていたから問題ないとはいえ、前の星でもろくに食べてなかったな。流石にこのままではまずいか……)

サイヤ人は一部の例外を除いてほとんどが大食漢だ。その例外が非戦闘タイプのもので、戦闘力こそあるもののターブルもあまり食べない。実際、今も空腹感があるわけではないのだが、これから強く鍛えあげようとしている肉体には栄養が必要で、食べることは必須だ。

とりあえず、何かを食べなければと考えたターブルは、近くの山間の溪流で大きめの魚を数匹捕らえる。さらにその途中で襲いかかってきたイノシシや翼竜もまた同様にして捕まえ、その全てを焼いて食べた。

普通なら捕まえるのも丸焼きにするのも手間な作業だが、そこは流石に戦闘力4桁台なだけあって瞬時に用意することは造作もなかった。

(食欲がないと思っただが、食べたらいけるな……)

以前との性格の変わりようのためか、はたまた1年間の絶食にやはり体が求めているのか、捕らえた肉も魚も瞬く間に胃袋に収まった。

ついでに村への行きがけの駄賃にと大きめの魚でも捕つていこうかとも思ったが、これは鮮度を考えてとりやめた。必要なら、村を見つけてからその近場で獲物を狩ればい

いのだ。

そんな寄り道をしながら、さらに100km近く移動した先でテーブルはついに目的の村を見つけた。

「のどかで実におあつらえ向きな村があつたじゃないか……、よつと」

テーブルが見つけたのは、自然が豊かであり広くはないが、程々に過ごしやすそうな小さな村だった。村の様子を上空から眺めてみれば、畑仕事なのか車輛で村のあちらこちらを掘り返している人達が見受けられる。

遠目からではよく分からないが、新しく畑でも作るためにあちこち耕しているのだろうか。そう考えれば力仕事をする人手が必要に思えるし、その方が路銀を稼ぐには都合がいい。

ひとしきり村の様子を眺めてからテーブルは村の隅の方に降り立ち、近くにいた村人に話しかけた。

「こんにちは」

「ん？ 見かけない顔の子供だな、こんなところまでどうやって来たんだ？」

「ボクは旅の途中でこの村に立ち寄った者です。何か働くことがあればお手伝いするので、余った衣服や食べ物があつたら恵んで欲しいんです」

テーブルが話しかけたのは見るからに人が好きそうなお爺さんだった。遠くから村

の様子を見て、あらかじめ断られにくそうな相手を選んだのだ。

「ああ、旅の途中に立ち寄ったのか。ふむ……もうじき夕方になる。家まで来れば婆さんが食べ物ぐらい用意してくれよう。服も他の村人に聞けば子供服の1着ぐらい用意できようて」

「ありがたいございます、お爺さん。ボクに手伝えることがあつたら何でも言つてください。力仕事なら、だいたいのが手伝えるはずです」

「はっはっは。見たところ、まだ小さい子供じゃないか。そういうことは気にしないでいいから、大人に任せなさい」

それなりに綺麗な村だったのが幸いしてかはたまた老夫婦の人柄のおかげか、詮索されることも無しに子供だからと食べ物も服も用意され、さらに何日か泊まっていくようにとまで言われた。サイヤ人の成長具合は地球人とは違うとはいえ、たしかにターブルは4歳でまだ幼いが、こうも厚遇されるとは思つてもなかった。

そうして老夫婦の家に招かれたターブルはお婆さんの用意した食べ物に舌鼓を打ち、いつの間にか用意されていた服に着替えて、そのまま1年以上ぶりのまともな寢床での眠りについた。

「……で、気がついたら朝になつてたつてわけだ」

寢室に用意してもらつたのは2階の客間だったので窓から外の様子を見てみると、ま

だ早朝にも関わらず村人の多くが既に外に出ていた。

昨日の食事の際にお婆さんから聞いた話によると、この一帯を支配する王国の兵士が村のあちこちで採掘作業をしているらしい。彼らは国王からの命令で動いているために村人も逆えないのだが、せめてもの抗議の意味を込めてみんなで見張っているのだという。

おそらくは村人はもう外に出ているのもその見張りのためだろう。兵士には横暴な連中が多く、見つかると面倒だからと連中が来ている時間は外に出ないようにとお爺さんからは言われているため、迂闊に外に出るわけにはいかない。

洋服は手に入れたが働き口は期待できそうになく、かといってお金を貰うのは気が引ける。この村を出るか、もう少し留まるかで迷っているターブルとしてはこの手持ち無沙汰な時間を使って、今後の方針について考えるつもりだった。

だが、この1年間でターブルの予定通りに進んだ事柄は少なく……それは今回もそうだった。

「おっと……どうやら、閉じこもっているわけにもいかなさそうだな」

遠くの方でガタイのいい村人と兵士達が揉めているのを眺めていたら、別方向からこの家の方へと重機が近づいてきていた。敷地内の庭でも掘り返すつもりか。いや、最悪この家ごと壊してしまいうつもりかもしれない。

「よし、戦闘民族サイヤ人の力を見せてやろうじゃないか」

ターブルはスカウターを片手に、窓を開けて勢いよく飛び出した。



少女は震えていた。それは単なる恐怖から来るものではない。理不尽への怒り、自らの無力への絶望、そして圧倒的な力を持つ支配者への反感……それらが入り交じったものだ。

少女の父は巨漢であり、少々の無法には屈しない強い男だった。そんな父が数と銃の暴力に捻じ伏せられた光景を見せられたのが、つい先程のことだ。

彼女らを縛り押さえつけるのは国だ。巨万の富を持つ王国と強力な国軍が敵なのだ。

そんな相手に誰が勝つことができようか。それどころか、抗うことも逃げることも無理なのだ。

「許せない、絶対に許さないわ……！」

その少女——パンジの国、グルメス国は大きな財力を持った豊かな王国とされている。だが、その実態は逆だ。国内の自然は荒れはてて、民は田畑や時には家をも奪われて

苦しんでいる。国王とそれに従う一部の者だけが、その豊かさを享受していた。

それゆえに軍隊は王に従い、自分達も恩恵を受けるために民を虐げることに迷いを持たない。

国民にとっては絶望的な状況にあるが、そんな中でもパンジには一縷の望みがあった。

「あの御方なら……あの御方ならきつと、私達を救ってくださいるわ」

今の絶望的なグルメス国を救えるかもしれない人物に少女は心当たりがあった。

それは、『武術の神』と謳われた武天老師。亀仙人とも呼ばれる、かの人物ならば……あるいは民や国を救えるかもしれない。

天を裂き、海を割り、山を砕く——武天老師にまつわる逸話の数々は、少女に淡い期待を持たせるだけの力があつた。

「武天老師様なら、きつと私達を救ってくださいる……」

武天老師の居場所を訪れた者が少ないためかはつきりとしませんが、南の海の先のどこかに住んでいるといわれている。

パンジは誰にも話さずに独りで国を離れて亀仙人を探す旅に出ようとしていた。そのままでは国が死んでしまう、その一心だった。

だが、そんな彼女の前に一人の少年が現れたことが状況を一変させた。



老夫婦の家の敷地へ入り込もうとする重機の前に躍り出たターブルは右手を重機を抑え、その進行を止めようとする。普通なら人間が止めようとしてもその人間ごと押し進むはずの重機が片手であっさりとは止められてしまう。

「地面に埋まつてゐるって宝石を掘り返すためにも、家まで壊すことないだろ。お爺さんお婆さんが生活してるんだぞ」

「なんだあ!? こゝ、このガキ……死にてえのか!」

重機に乗っている兵士が怒鳴り、いかにもガラの悪そうな兵士が2人、ターブルへと近づいてきた。

「ボウズ、大人の仕事の邪魔しちやあいけねえなあ!」

「見かけない顔じゃないか、余所者か?」

「この国の兵隊さんとやらの戦闘力は、と……。なんだ、ここらにいるヤツらはどれも5から7か。やれやれ、殺さずに倒すのが面倒なぐらいだ」

スカウターで目の前の3人を含めた、この村にいる兵士達の戦闘力数値を計測してみれば、村人とそう変わらないものからやや強いものまでの範囲内だった。おそらくは

さつき数人がかりで倒された大柄の村人が一番高い数値を叩きだしただろう。

「なんだ？ 妙な機械を持つてるな……」

「どうでもいいさ。こいつ、つまみだしてやる！」

そう言つて兵士の1人が頭を抑え込もうと手を伸ばすが、その伸ばしてきた手を潜り抜けてターブルが左手で軽くデコピンする。当人としては充分に手加減したつもりの一撃は兵士を軽く20mほど弾き、そのまま意識を飛ばした。

「くそつ、やつぱり加減の仕方が上手くないかな……。これじゃあ、何人か殺してしま
う」

「なっ!? ガキ、てめえっ!?!」

驚いたもう1人の兵士が容赦なく機関銃を向け、躊躇なくそのまま打つ。

「ひよいひよいひよいのひよい」

だが、ターブルは左手だけで射たれた機関銃の弾の全てをつまみあげてしまう。残像がいくつも見える左手と次々とその掌から落とされる弾丸の光景に、遠巻きに見ていた村人と敵である兵士達までがどよめきの声をあげる。

「ひええっ!?! ウ、ウソだろ……!?!」

機関銃が弾切れになり、兵士は腰を抜かして悲鳴をあげる。そのまま背後に回り込んで当身を食らわせるとその兵士はあえなく意識を失ったが、その隙に右手で抑えられて

いた重機が解放され、操る兵士は隙ありとターブルへアームを向ける。

「この野郎、こいつで捻りつぶしてやる!!」

「ずいぶんと原始的な構造のメカだな……。これなら壊してもいいだろう、それっ」

振りかざされたアームを片手で受け止めると、そのままひよいと重機を持ち上げて50m以上先にある別の重機に投げつける。

それぞれの重機に乗っていた兵士は一瞬、事態を飲み込めなかったが、生命の危機を感じて慌てて飛び降りる。直後に重機2機が衝突し、そのまま爆発を起こす。

「な、なんて怪力だ……。こいつ、まさか妖怪か!」

「バケモンだ、このガキ! 逃げろっっっ!」

重機を破壊される一連のシーンに完全に戦意を失い、散り散りになってグルメス兵達は逃げていった。

ターブルに気絶させられた兵士の2人は置いてきぼりだが、重機のアームを向けてきた残りの1人は他の兵士に紛れて逃げようとしていた。

そうはさせまいとターブルはその兵士の目の前に回り込んで捕まえる。

「わ、悪かった! 許してくれえ!」

「いくつか聞きたいことがある。正直に答えたら解放してやる。だが、嘘や陥れるようなマネをしたら……」

「わ、分かった！ 答えるからなんでも聞いてくれ！」

「なぜ家まで壊そうとした？ リッチストーンとやらを掘り返すなら、手間のかかる家じゃなく他から先にするべきだろう。何か別の目的でもあったのか？」

「あ、ああ……それは家の中に隠されてないか調べるためだったんだ」

「隠してないか調べるだと？ どういう意味だ？」

「ドラゴンボールよ！ グルメス王はリッチストーンよりドラゴンボールに躍起になつてるから誰かが持つていないか探してたのよ！」

思わぬところで出てきた『ドラゴンボール』という言葉に、横から割つて入つてきた声の主の方へと顔を向けると、そこにはターブルと同じぐらいの背丈の少女が立っていた。

「キミは？」

「私はパンジ。この村に住んでる住人よ」

そう名乗るとパンジは兵士に変わつて話を始めた。

「少し前からドラゴンボールつて球がこの村の辺りにあるはずだつて、今まで以上に無法を始めたの。それからは村人の住む家だつてお構いなしに壊しだしたの」

「なら、この近くにドラゴンボールがあるはずだつて確実な情報があるつてことか……。そうでもないのにそんな無茶はしないはずだよな？」

テーブルが睨みながら問い詰めると震え上がった兵士は慌てて頷き、彼を放置してあった大きめの重機へと案内した。

「こ、こいつにレーダーが載せてあるんだ！ これでドラゴンボール反応を分かるようになってる！」

得意げに自慢する兵隊からレーダーを奪う。ドラゴンボール・エナジー・レーダー、通称ドラゴンレーダーとも呼ばれるそれには確かにそれらしい反応があるが、範囲がおおまかで分かり辛そうだった。

「そ、そうだろう！ だから我々も採掘と並行して搜索していたが難航していたのだ！」
「……いや。このレーダー、ちゃんと範囲を絞れるな。拡大すれば簡単に探せそうだ」
「な、なにっ!？」

どうやら彼らはレーダーの操作方法の説明もろくに受けずに使っていたらしい。

テーブルはドラゴンレーダーを使い、わずか10分程であっさりドラゴンボールの1つを見つけた。

「星が5つ……五星球ウーシンチユウか」

五星球とドラゴンレーダーを懐に収めてから、とりあえず兵士は開放する。兵士は気絶していた2人を起こすとそのまま逃げ去っていった。

その様子をパンジと並んで見届けていたテーブルは呆れた様子でため息をつく。

「それにしても、宝石を掘り返させて贅沢三昧してらつて話なのにドラゴンボールまで探してるのか。この国の王様はどれだけ欲張りなんだ」

「グルメス王を誑かしてる連中がいるのよ。それに、グルメス王がドラゴンボールを探してる理由は……」

パンジは噂や伝聞で知つたという、グルメス王に起きた出来事を語つた。

グルメス王は数年前にリッチストーンという世界最高の宝石が国中に埋まつていることを知り、採掘させて莫大な財力を手に入れた。それにより王は贅沢の限りを尽くし、元々の趣味だった美食を極めようとした。

だが、美食を追い求めすぎた罰が下つたのだろう。王はいつしかそれまで以上に味なものじゃないと食べられない、呪われた怪物に変化してしまつた。

怪物となつたグルメス王は世界中の美味しいものを集めるために必要と、さらにリッチストーンを掘り返させた。そのために山も田畑も湖も掘り返され、自然豊かな国のあちこちが荒れてしまい……今や国中の自然が死んでしまいかねない状態だという。

だが、そうまでして得た財力で集めた世界中の美味珍味も、王の食事を支えるにはもはや限界となつていた。グルメス王は既に世界中のめぼしい美味を食べ尽くしてしまひ、前以上に旨い食べ物が見つからなくなつてしまつたのだ。

それで、どこで知つたのか？ 集めればどんな願いでも叶うというドラゴンボール探

しに焦っているのだという。

「そうか、グルメス王は空腹で暴走してるのか……」

「でも、やっぱりグルメスは自業自得よ。でも、このままじゃグルメスと一緒にこの国まで死んでしまうわ。そして残るのはグルメス国の強力な軍隊だけ……」

「軍隊……今の連中みたいなのか？」

「軍隊を指揮してる上級兵士がグルメスの側近にいるの。あいつらはグルメスを利用してリッチストーンを自分達のために手に入れようとしているの。ドラゴンボールのことだって、きつとあいつらが教えたに決まってるわ……！」

この国を元の平和な国に戻すには、グルメス王と側近をどうにかしなければならぬ。そしてそれは、強大なグルメス王国軍を相手にすることを意味する。

「……なるほどな。よし、この村には食べ物や洋服や寝床までお世話になった借りがあ。ボクがグルメス王のところに行ってきた話をつけてこよう」

「無茶よ！ グルメス王のところに行くまでに、大勢の兵隊が守ってるわ！」

「さつき見せたように、数は問題じゃないよ。それに一応、穩便に話を進めるつもりだし。……いや、それも言ってもらえなさそうか」

ターブルの目には遠くに見えるグルメス城の方角からグルメス王国軍のものらしき飛行機がこの村……いや、ターブル目掛けて向かってきているのが見えていた。

「離れてるんだ、パンジ。どうもあれに乗ってるヤツらは、ボクかこの五星球に用がありそうだ」

ターブル達を目標にグルメス城から飛んできたグルメス軍の飛行機はパンジ達の村へは着陸せず、その上空を旋回し続けた。その代わりに、飛行機から大柄の男が出てきて、そのまま飛び降りた。

男は巨大な金属製の六角棒を右手に持ち、足に装着した円盤上の飛行土台を器用に操作して落下速度や斜角を調整し、勢いを殺すことなく降下してくる。

そうしてターブルの正面に上空から滑り降りるようにして男は降り立ち、降下の際につけていたゴーグルを外す。

「お前かあ、この村によこした兵隊相手に大暴れしたってのは？ ガキのくせに、ずいぶん強いらしいじゃないか？」

大男がそうターブルに話しかけると周囲を遠巻きに囲んでいる村人から『ボンゴだ』や『上級兵士だ』などという怯えた声が聞こえてくる。

どうやら目の前の、おそらくボンゴという名の男はグルメス王の側近で実力者らしい。そして腕前にも相当の自信があるようだ。

「面白い玩具を使ってるじゃないか。そいつを使えば自在に空を飛べるワケだな……、

それで空中戦に挑めるといふことか？」

「えっへっへっ、面白いじゃねえか。どうやら、ただのガキじゃなさそうだ」

探るように煽ってみるが、乗ってこない。どうやら見た目ほど単細胞ではないようだ。とターブルはボンゴへの評価を少し上げた。

だからこそ、この先の流れで戦うことはお互い分かりきっていたために、ひとつ忠告することにした。

「ただの子供じゃないと思うのなら、侮らずに最初からその武器を使って本気でかかってくるんだな。こちらも手っ取り早くて済むし、お互いのためだ」

「そうかい。なら……遠慮なく、そうさせてもらおうぜ」

言うや否や、ボンゴはその巨漢な身の丈程もある六角の金砕棒を振りかぶる。ターブルはその大振りの一撃をギリギリで、だが余裕で躲した。

「ひょい」

「このガキ、速えじゃねえかあ！」

初撃でスピード差は分かったのだろう、ボンゴはすぐさま変則的な動きを混ぜつつ連続で攻撃を加える戦い方にシフトさせた。

ボンゴの持つ六角金砕棒は真ん中を柄として先が両側とも打撃部分となっており、通常のものより多彩な攻撃を加えられる。また、搭乗している円盤上の飛行土台は、彼に

空陸を問わない立体的な行動を可能とさせていた。

これらの組み合わせにより、ボンゴは巨体に似合わぬ速さと変則的な動きを両立させていた。

「ぬおおっ!? こいつ、ちよこまか動きやがる!」

「ひよい、ちよい、ほいつ」

だが、立体的かつ高速で動きながら変則的な攻撃を連続で加えようとも、ターブルはその全てを避けていた。

全力でかかってもかすり傷さえ負わせられない戦況はボンゴをおおいに驚かせたが、それでも彼から冷静さを奪うには至らず、すぐに奥の手を切る決断をさせる。そしてさらに何撃かの後、殴りかかった側の六角棒の先端が途中から切り離され、それらを繋ぐ鎖がターブルへと絡みついた。

意表を突かれたこともあり、ターブルは感嘆の声をあげた。

「ほう! 捕まえられるとは思わなかった!」

「どうだあ! このまま引きずり回してやろうかあ!」

スピードでは勝てずとも捕まえてしまえばこちらのものと言わんばかりに、ボンゴはそのまま自分の方へとターブルを引き寄せんとする。

だが、ターブルは涼しい顔で特に力を入れている様子も見られないにも関わらず、ボ

ンゴが全力で引いてもその場から一步も動かせなかった。

「ぬぁにいいっ!？」

「戦闘力数値43か……なるほど、今までの連中よりは何倍も強いな。それに、その装備を考慮すれば実質の戦闘力は50以上かもな」

彼我のパワー差を見せつけられながらスカウターでボンゴの戦闘力を計測すると43と出た。村人や兵士達の戦闘力はどれも5前後がほとんどだったことから、地球人としては破格だろう数値だ。

(さて、お遊びとしては楽しめたが戦闘力も測ったし、そろそろ終わらせるべきかな……)

ターブルが戦闘を楽しむことから目の前の相手をどう手加減して倒すかについて意識を傾けて考えを巡らせた、その時。

「おイタはそこまでよ! やめなさい、ボンゴ!」

突然、戦いを中断するように上空から声が響く。その声にボンゴは舌打ちを1つして、ターブルを捉えた鎖をほどく。そうしている間に、今まで様子見をしていたのだから飛行機が着陸してきて、その中から女が一人出てくる。

おそらくは彼女もボンゴと同じグルメス王の側近である上級兵士だろうが、大男のボンゴとは対照的に美しい女だった。

「まさか、子供がドラゴンボールを持つてるとはね……」

女の第一声はそれだった。ボンゴの時と同様、村人の話し声から彼女の名前はパスタということと、推測通りに上級兵士らしいことは分かった。

だが彼女は敵意を見せることなく、笑顔を見せると柔らかい口調でターブルに話しかけた。

「ボク、お姉さん達はあなたとケンカするつもりはないの。お互いのため、ここは平和的に取引とイかない？」

「取引、だと？」

パスタの言葉にターブルは訝しげに応える。パスタは逃げ帰った兵士達の報告からターブルが自分達に挑んできた理由が村人のためだと理解していた。

「ええ。あなたがここで矛を収めてくれるなら、リッチストーンの採掘はこの村からは手を引かせるわ。それは前提条件ね」

「前提？」

「そう。それでね、ボク……お姉さん達にそのドラゴンボールを渡す気はないかしら。お礼にこれをあげるわよ？」

パスタが見せたのは一枚の、コウモリをあしらったグルメス王国の金貨だった。それを見たターブルは少し考えるそぶりの後で、無言で指を3とした。

「ちゃっかりしてるじゃない。ふふ……嫌いじゃないわよ、そういうコも」

そう言つてパスタは金貨を3枚放り、それとほぼ同時にテーブルもドラゴンボールを放った。

「取引成立ね」

パスタはドラゴンボールが本物かどうかを確認すると満足げに頷いた。

「そうそう。ボク、名前を聞いてもいいかしら？」

「……ターブル」

「またどこかで会いましょう、ターブル。その時にあなたが敵じゃないことを祈つてるわ」

意味ありげに微笑むとパスタはそのままボンゴを引き連れて飛行機で飛び去っていった。何かの含みがあったのだろう彼女の真意はターブルには理解できなかった。

「あのボール、あいつらに渡しちゃっていいの!？」

パスタ達の飛行機が遠くの空に小さく見える頃になって、パンジが駆け寄ってきた。

「あれは別に今はいらないし、この村に手出ししない約束をするのにちようど良かったからね」

「それはそうだけど……、あいつらはグルメス王をたぶらかしてリツチストーンを手

入れようとしてるって話よ。約束なんて守るかしら」

「この村の1つぐらい、ボクを敵に回さずにドラゴンボールが手に入るなら手放してもいいと思つたのさ。リッチストーンは他の村から掘り返せばいいのだからね。少なくともボクがいる間に約束を破つて、ボクを敵に回すほどあの女は頭が悪そうには見えなかつた」

「違うわ……！ それじゃダメなの、この村だけ助かつてダメなのよ。今はもうこの国全体が死にかけてるのよ！」

この村が救えたから良いというターブルの言い分をパンジは真つ向から否定した。彼女は村だけでなく国全体の平和を願っていたのだ。

ターブルはそんなパンジをしばらく見つめると、懐からドラゴンレーダーを取り出す。

「分かつたよ。じゃあ、最初の予定通りにグルメス王に会つて話をつけてこよう。あいつらがドラゴンボールを持っていったおかげで、このレーダーを使えば城までの道案内になつてくれる」

ターブルはパンジにそれだけ言うとそのまま離れ、一晩泊めてもらったお礼を老夫婦に告げに行った。その様子をパンジはぼんやりと見守っていたのだが、荷物を持って家からターブルが出てきたのもう一度話しかけに行こうとした。

最初に止めたように、王様に1人で会いに行くなんて無謀にも程があると言おうと思っていたのだが……しかし、ターブルは家からそのまま空へと浮き上がり、そのまま城の方へと向かって行った。

「えっ……!? なんだあの子、飛べちゃってるの……?」

飛行機と同じくらい速く飛んでいくその姿を遠くに見つめ、しばらくパンジは呆然と立ち尽くしていた。

* * * * *

太陽がちやうどグルメス国の真上に昇った頃、パスタとボンゴの乗る飛行機とその背後をつけたターブルはグルメス城へとたどり着いていた。

ちなみにターブルはまだ気配を消す技能は身につけていないため、地球人では達人さえも目で追えない超スピードで移動することで追跡を悟られないようにしている。よほどの広い空間で遠目から見られるでもない限りはバレないだろう。

「ドラゴンレーダーの反応でこのまま王様の居場所まで行けそうだが……コイツの精度がどこまでアテになるか怪しいし、過信は禁物か」

念のためにとドラゴンレーダーを懐に入れて、代わりにスカウターを取り出す。

「こいつでボンゴとかいうでくの坊の戦闘力を探れば、居場所は確実に分かるからな。自分らの懐に収めるつもりでもない限り、城に戻ったらまずドラゴンボールを王様に献上するはずだ。そこを狙う」

グルメス王を誑かしているとパンジが怪しむような Pasta 達がドラゴンボールを素直にグルメス王に差し出しているかは怪しかったが、その時はその時。

スカウターで算出したボンゴの位置から追跡して、ついにターブルはグルメス王の居る謁見室……いや、食卓まで辿りついた。

「おおお……見つけてきたか、3つめのドラゴンボールを。ならば、あと残りは4つ、急いで集めてくるのだ……!」

部屋の中からグルメス王らしき男の声が聞こえてくる。スカウターの数値を見る限り、室内に居るのはグルメス王と Pasta とボンゴのみ。今が好都合とターブルは突入を決断した。

「おっと、その前に聞きたいことがあるんだ。全員、動かないでもらおうか!」

「お前っ!!」

「ターブル!?!」

ターブルは部屋に入るとそのままボンゴへと一直線に向かい、腹部めがけて右の拳をめり込ませる。その一撃は強烈で、タフネスを誇るボンゴもあっさりと白目をむいて意

識を失った。

もつとも腕の立つはずの部下を一瞬で仕留められた驚きにグルメス王は肥大化している左目をぎよろつかせた。

「な、なんだ……、お前は……!?!」

「近くの村で世話になった戦士……いや、武道家だ。村の人から事情を少しだけ聞いた。国中が王様と軍隊のせいで迷惑しているとな」

「……そうか」

「ドラゴンボールはいいさ。旨い料理をもらうか、元の姿に戻してもらおうとしているのだからことは分かる。でもリッチストーンを掘り返すのは止めてくれないとな……退治しちゃうよ?」

ターブルが凄んでみるが、意外にもグルメス王は怯える様子を見せなかった。

「……それは違うな。ドラゴンボールはワシが使うために集めたわけではないし、今やあのリッチストーンとして好きで掘り返しているわけでもない」

「は?」

「グルメス王!」

想像だにしなかった言葉にターブルは思わず聞き返した。

同じ様に驚いたのだろう。パスタの制止にも意に介さず、グルメス王は話を続ける。

「ワシがこのような醜い姿になったのもそうだ。全てがあやつらの思うがままになり、もはやワシは傀儡となり果てておる……。ワシがドラゴンボールを集めている理由も、それを渡せば元の人間に戻すと取引をしているからに過ぎん……」

「まさか……グルメス王でも軍隊でもなく、別に黒幕がいるのか……？」

「ワシも最近になってようやく全てがあやつらの仕業だと気づいた。まさか、最初にリッチストーンについてワシに教えたことすらあやつらの企みだったとは……」

「……感心しませんなあ、グルメス王。いかに相手が子供だとして、無闇にそのことについて話すのは『あの方』への反抗と取られかねませんぞ」

グルメス王の話を遮るように、王の背後……玉座の影から声が響いた。

その影からひとかたまりの闇が離れて形を成し、グルメス王とは逆に右目をぎよろつかせた背の低い老人へと姿を変える。

「ドラゴンボールを預かりに来ましたぞ、グルメス王。我らが主——ルシフェル様の命にて」